2
東書
小国 402

文部省著作教科書

国語

第四学年

下

TIA7
1LO
2

教
3
01

60146

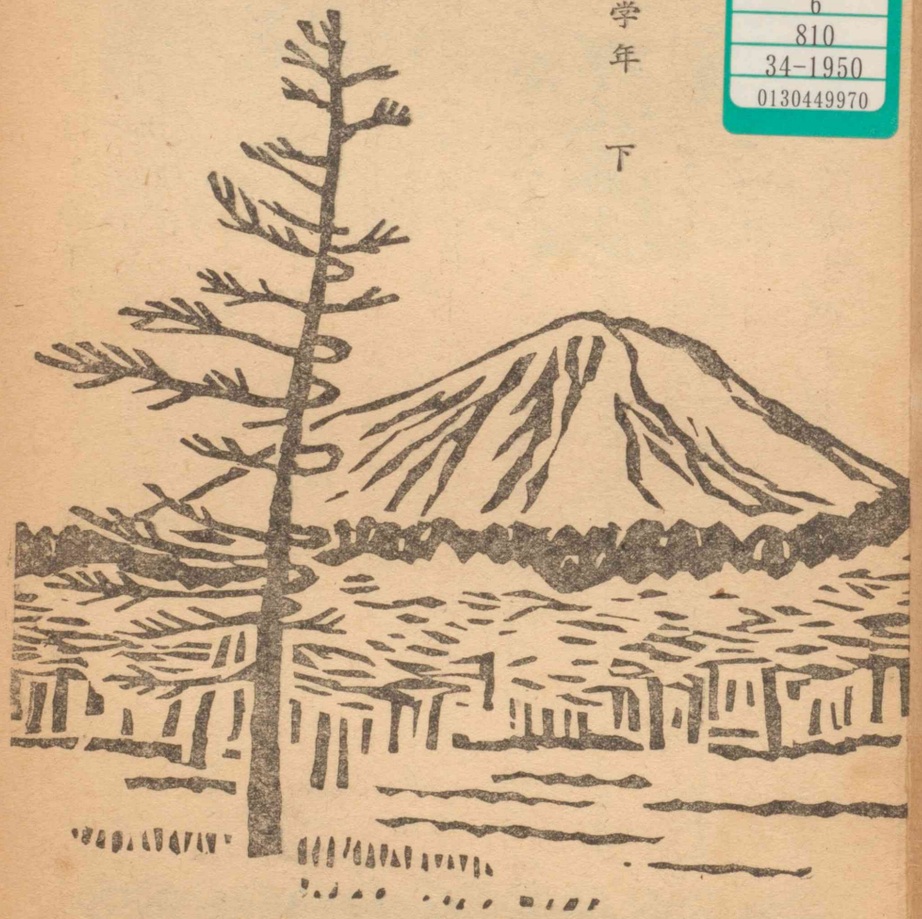
教科書文庫
6
810
34-1950
01304
49970

広島大学図書
0130449970

国語

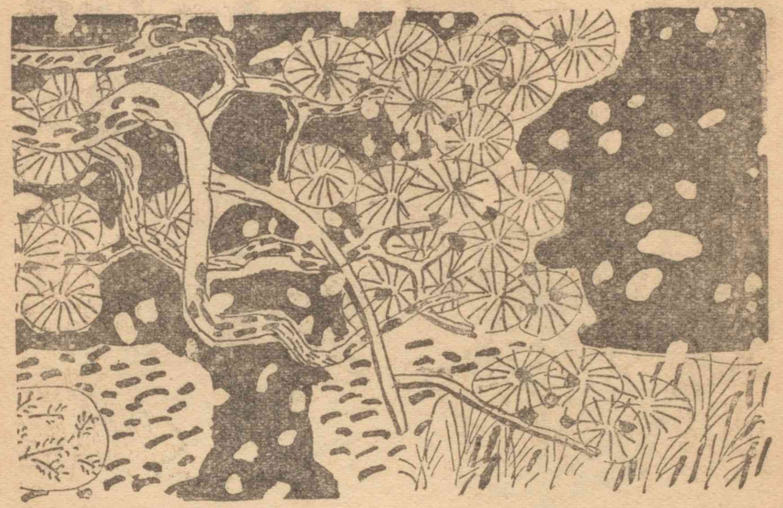
第四学年　下

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449970



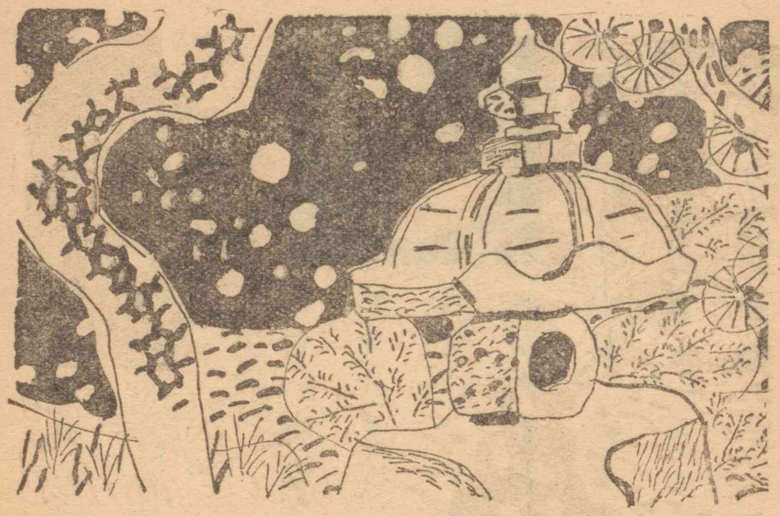
中央図書館

広島大学図書
0130449970



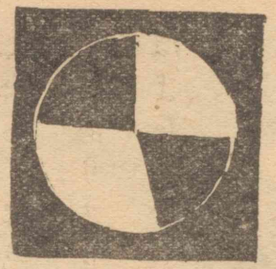
もくろく

一　組みあわせ……四
（一）
（二）
（三）
二　音というもの……十
三　つばめ……十五
四　タやけ……二十六
五　先生とみなさんへ……三十一
六　どんぐりとやまねこ……四十七
七　貝づか……七十六
八　なかよし……八十七
九　山のスキー場……百四
十　ちょ紙……百十四
十一　いずみを求めて……百十九
十二　一ぴきのくも……百二十七



一　組みあわせ

（一）



白い紙に赤い色をぬりますと、明かるい感じになります。この赤い色のそばに黄色をぬりますと、赤い色だけでは感じられなかった明かるさがあらわれます。

黄色のかわりに、みどり色をぬってみると、また、ちがった感じがします。

みどり色のかわりに、むらさきをぬったら、どうなるでしょ

う。

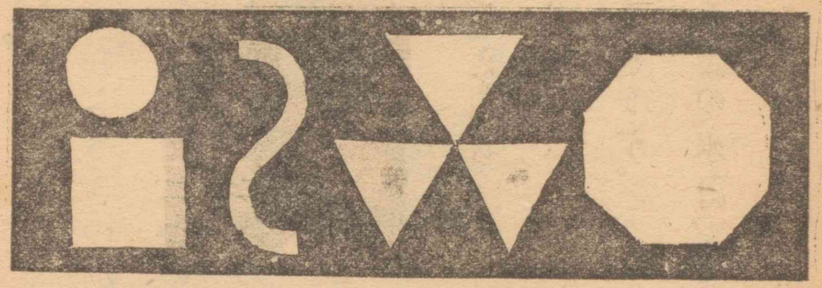
むらさきのかわりに、茶色をぬったら、どうなるでしょう。

これは二つの色の組みあわせですが、三色の組みあわせにしたら、二色のときよりも、もっとちがった感じがするにちがいありません。四色、五色と数をましていけば、その感じはまたふかくなるでしょう。

（二）

オルガンで一つの音だけひいてきいても、その音には、ある感じがこもっているものです。

この音と、ほかの音とをいっしょにひいてみると、まえと



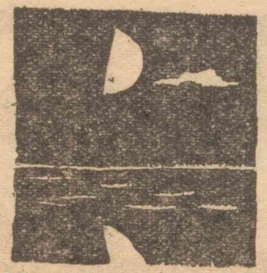
はちがった感じがします。

三音、四音と組みあわせてみると、さらにちがった気持がします。

オルガンのほかに、バイオリンとか、フルートとか、ほかの楽器を、いっしょにあわせてひいてみたらどうでしょう。音をうまくあわせると、とけあった美しいひびきとなってきこえるにちがいありません。

色の組みあわせが、さまざまの感じをあらわすのと同じように、音の組みあわせも、いろいろな気持をあらわします。

（三）



ここに、「月」という一つのことばがあります。このことばを耳にしたり、文字でよんだりしますと、夜のしずかなけしきを思いだします。

この「月」ということばに、「水」ということばをそえたら、どういうけしきを思いだしますか。「月」だけで思いだした心の絵とは、いくらかちがったものがあらわれてくるでしょう。

この「水」は、さらさらと流れる小川ともなり、ちらちらと光るいけともなり、また広い海ともなります。

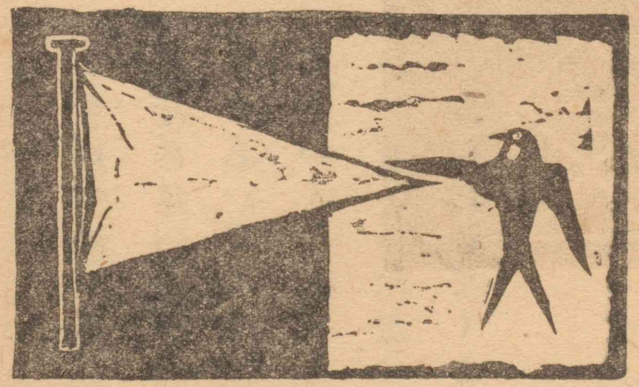
さらに、「虫の声」ということばを加えたらどうでしょう。

色の組みあわせも、音の組みあわせも、おたがいにとけあって、一つの感じをつくりあげると同じように、ことばの組みあわせも、それぞれちがった新しい思いをおこさせます。

「風」ということばに、ほかのことばをつけてみましょう。

「風」を「朝風」として、これにいろいろなことばをつけてみましょう。

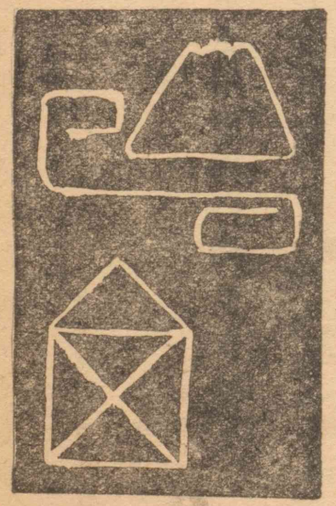
おしまいに、「山」「けむり」「絵はがき」「港」「友だち」など、い



ろいろなことばを組みあわせてみましょう。

二つか、三つのことばの組みあわせだと、すぐ心にものを思いうかべることができますが、あまりたくさん重ねると、ごちゃごちゃになって、まとまりがつかず、心の絵がみだれてしまいます。

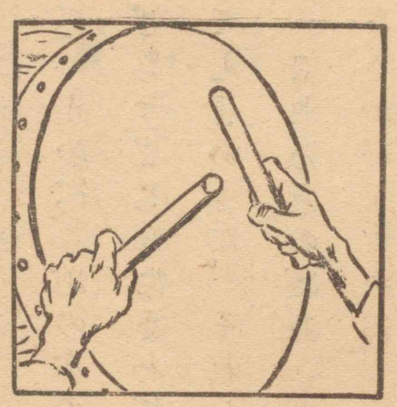
これは色のばあいでも、音のばあいでも同じことです。



二　音というもの

このあいだ、ラジオで、「げき場音楽の話」をきいた。

その中で、たいこのたたきかたによって、いろいろな心持をあらわすことができるし、また、さまざまな情景を写しだすこともできるという話がおもしろかった。



その例として、まず、水の音をとりあつかった。水の音をたいこであらわすことなどは、ちょっ

と考えられないが、じっさいにきいてみると、たしかに水の音である。

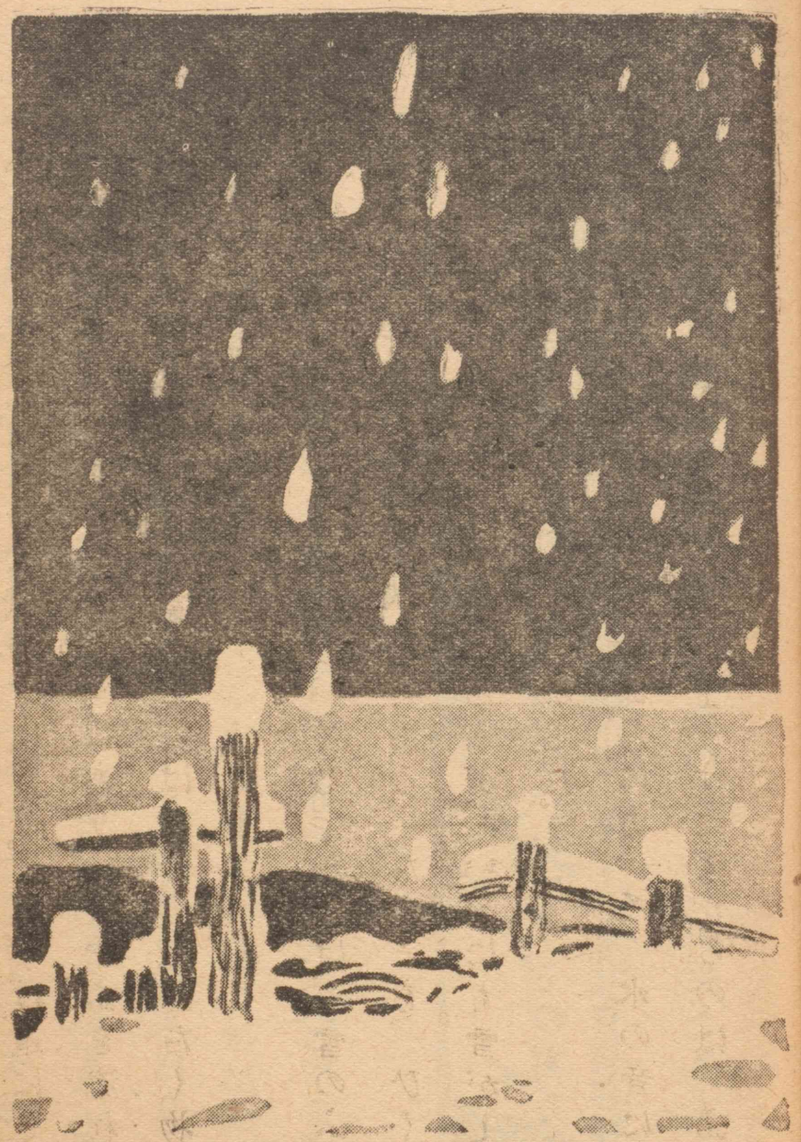
はじめに、川の水の音をたたいてきかせてくれた。川波がザワザワとたちさわぐところである。つぎには、雨のふるところであった。それから、水の中にドブンととびこんだときの音もあらわした。おしまいに、海岸で波のくだけるところをきかせてくれた。ドドンドドンとなる大だいこの音は、ほんとうにうちよせる波の音をきいているようであった。

つぎに、風の音をたたいた。風といえば、「そよそよ」とか、「ザワザワ」とか、「ビュウビュウ」とかいうことばであらわしているが、それをたいこであらわすというのだからおもしろい。

よくきいていると、たしかに風の音になる。とうげ道にさしかかったとき、さっとふいてくる風であり、竹やぶを流れてくる風であり、町の通りを、電線を、はたを、せんたく物をふいている風である。

風の音よりも、もっとおもしろいと思ったのは、雪のふってくるどころをあらわしたひびきである。たいこを、ひくく、こまかくつづけてうち鳴らすのであるが、いかにも雪がしんしんとふりしきっているような気がした。

ただ一つのたいこが、そのうちかたによって、水の音にもなり、風の音にもなり、雪のふるようすにもなるのは、ふしぎである。



しばいで、ゆめをみていた人が、にわかに目をさます場面を演ずることがある。こんなときにも、たいこをつかう。ゆめからさめるときには、音などはけっしてするものではないが、やはりたいこをたたく。

音というものは、情景をあらわすばかりでなく、心持まであらわすことができるものらしい。

いい音楽をきいても、それがわからないのは、その高さを受けいれるだけの心持をもっていないからであろう。もし、きく人の心が高ければ、それだけ音楽のねうちが生きてくることになろう。

三　つばめ

夏の終りごろ、つばめが電線や物ほしざおに五六ぱぐらいならんでとまっているのを、よくみかけます。ときには、十ぱも二十ぱも、ずらりとならんでいることがあります。この中には、親つばめもいますが、ことし生まれた子つばめが、たくさんまじっています。もう大きさだけは親つばめと同じ

ですが、まだ、口ばしの下の赤色が、親つばめほどこくありません。口ばしの両わきがいくぶん黄色にみえるのさえあります。

こうして、大ぜいのつばめが、ならんでいるのをみると、なにかしら相談でもしているようにみえます。まもなくさっていかなければならない日本に、なごりをおしんでいるのかもしれません。これからいこうとする遠い国のことを、話しあっているのかもしれません。

やがて、九月のなかばをすぎると、つばめは、そろそろ日本をさっていき、十一月のはじめになれば、もうほとんどすがたをみせなくなってしまいます。

つばめのゆくさきは、遠い南の海のかなたです。

とうきょうから四千キロもあるフィリピンで、ある年の十月のすえ、子どもがつばめをつかまえました。すると、その右の足に、日本の文字をしるした小さな金ぞくのいたがついていました。それによると、さいたま県のあるところで、こころみに、しるしをつけてはなしたものだということがわかりました。

しかし、つばめは、もっともっと南へとんでいくのです。南洋の島々から、さらに海をこえて、遠いオーストラリアまでいくのがあるということです。

日本のつばめは、こんなふうに渡っていきますが、ヨーロッ

パのつばめも同じように、ヨーロッパの北の方ではんしょくしたものが、秋には、南ヨーロッパを通って、遠くアフリカまでもいって、冬ごしをします。

つばめは、鳥の中でも、たいへん早くとぶ鳥です。汽車や自動車もかなわないくらいの早さですから、なん百キロの海をひといきにとぶのも、けっしてふしぎではありません。しかし、その中には、ことし生まれた子つばめがたくさんいます。また、ときには、あらしや、そのほかの思いがけないさいなんに、あわないともかぎりません。

しょうわ六年の秋、オーストリアの都ウィーンでのできご

どです。約十万ばのつばめが、きゅうに落ちてきたことがあります。その年は気候がわるくて、九月の中ごろ、きゅうに十二月の気候と同じ寒さになり、雨がふりつづきました。おりから南へ飛行中だったつばめは、食にうえ、つめたい雨にずぶぬれになって、身動きもできなくなってしまったのです。

ウィーンの動物ほご協会に、近くのランネルスドルフというところから、はじめて、電話でこのことを知らせてきました。協会では、喜んでつばめのせわをする返事をしました。それと同時に、協会ではすぐに、寒気のために苦しんでいるつばめのせわをすることを、新聞に広告しました。

その広告は、たいへんなはんきょうをまきおこしました。

「かわいそうなつばめをすくえ」という運動に全国民が、加わったほどです。

協会へは、電話が、ひっきりなしにかかって、つばめを集めていることを知らせてきました。そのつばめを運ぶのに六台の自動車ではまにあわず、さらに二台の自動車を加えました。そうして自動車は、夜なかの二時、三時にも、よわりきっているつばめたちを運んできました。

さいわいなことに、そのとき、あいていた家が一けんあったので、協会では、おおいそぎで、その家をつばめたちのためにぐあいよくつくりなおしました。へやはいそいであたためられ、たくさんのはりがねがはりまわされて、つばめたち

のとまるところがつくられました。

いく千というつばめたちは、人をおそれず、へやにはいってくる人があると、たちまち、そのかたや、頭や、手にとまりました。

たくさんのつばめがはじめて運ばれてきたのは、九月十七日でした。その日はたいへん寒いあらしの日で、朝からばんまで、こやみなく雨がふっていました。ばんの十時に、二千ばのつばめが着きました。その夜半には、また一台の貨物自動車が、五千ばのつばめをつんできました。

そこで、なるべく早く南のあたたかいところへ運ぶために、飛行機をつかうことにしました。航空会社では、お金をとら

ずにつばめを運ぶことを申してました。つばめをのせた飛行機は、それから毎日のように、アルプスをこえてヴェニスへとんでいきました。それでも運びきれなくて、九月十九日のばんには、ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあたたかくした貨車を一つつけて送ったほどでした。

汽車や飛行機で送られた数は、だいたいつぎのとおりです。

九月二十四日	飛行機で	二千ば
二十五日	同じく	二万五千ば
二十六日	汽車で	五万ば
二十九日	飛行機で	一万ば
十月一日	飛行機で	一千六百ば
二日	同じく	九百九十ば
五日	同じく	のこりの三十九わ

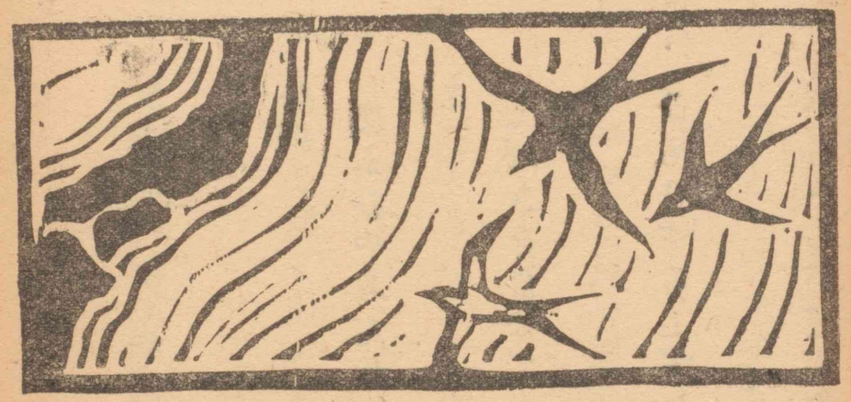
この合計は、約八万九千ばです。このほかに、オーストリア動物園の人たちがひき受けて送ったつばめを加えると、十万ばあまりになります。

そのころ、オーストリアは第一次世界大戦のあとで、まだそのいたでがなおっていないころでした。しかし、この国の人々が、あわれなこの小鳥たちにしめしたもっとも人間らしいあたたかい気持は、この国の人々が、どんなに高い教養をもっているかを世界じゅうに知らせた大きなできごとでした。

また、飛行機という文明の利器が、このしごとにつかわれたということを、たいへんありがたいことだといわずにはいられません。

むかしから、つばめは、同じ家に帰ってくるといわれています。つまり、ことしある家ののき下ですをつくったつばめは、来年また、同じすへもどってくるというのです。近年になって、いろいろな方法でこのことをしらべてみますと、やはりそうであることがわかりました。

日本からオーストラリアまでは、一万キロあまりもありますが、つばめは、けっして自分の国をわすれません。日本に春がくると思うと、もうやもたてもたまらず、北をさしてすすむのです。その小さなむねには、わか葉のもえる日本の春の美しさを思いうかべているのでしょう。あの家ののき下につ



くったふるすがなつかしいのでしょう。

春になると、だれもが、このめずらしいお客の帰ってくるのをまちこがれています。ちらりとつばめのすがたをみた人は、きっと、

「きょう、はじめてつばめをみたよ。」

といって喜びます。わけても、自分の家へいそいそと帰ってきたつばめをむかえる人の心は、どんなにうれしいことでしょう。

四　夕やけ

麦ふむやみだれし麦の夕日かげ
上ばきを自分でつくるわらしごと
子もりするしずかなる月なの上に
かあさんがぼんやりみえるかやの中

こがらしや子ぶたのはなもかわきけり
月の夜をわが家のありしあたりまで
すみきったボールの音や秋の風
秋風にプールの水がゆれている
草原に一本あかしはじもみじ

二重にじ青田の上にうすれゆく

朝つゆの中に自転車のりいれぬ

親のまたくぐる子うしや草の花

ほし草にかげおとしとぶとんぼかな

持ちかえしせんこう花火のゆれている

大空にのびかたむける冬木かな

かい道をきちきちととぶばったかな

下雲へ下雲へタやけうつりさる

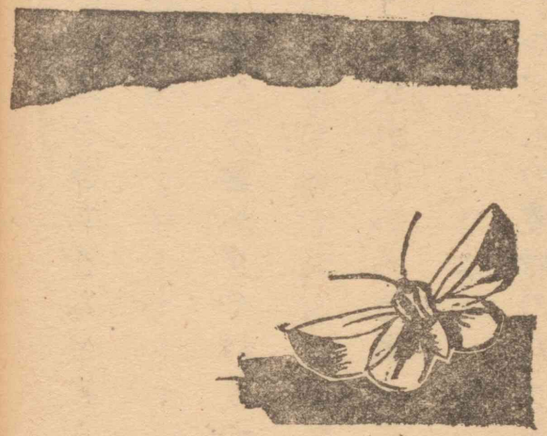
うらがれにおろされ立てる子どもかな

かやごしの電燈のたまみておりぬ

さるすべりラジオのほかに声もなし

くれていくすをはるくものあお向きに

まえ向けるすずめは白し朝ぐもり



ひたいそぐいぬにあいけり木のめ道

歩みくるむねのへにちょうとびわかれ

五　先生とみなさんへ

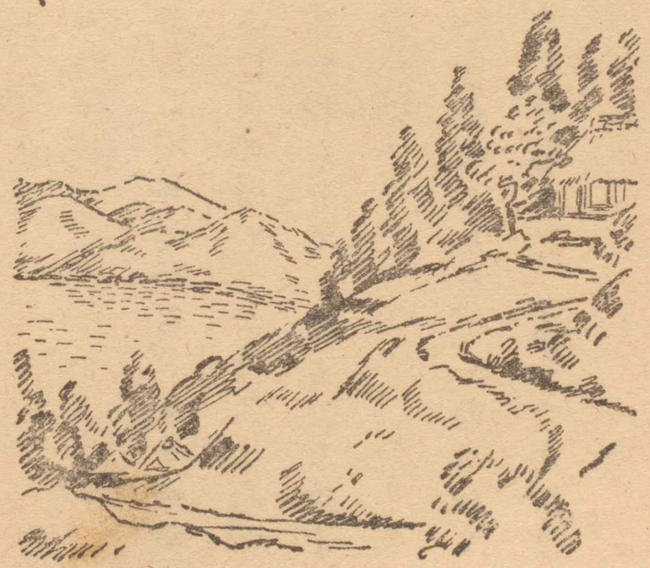
長らくごぶさたしています。こちらへきてから、もう四か月になります。こちらへきたときは夏の暑いさかりでしたが、いまはもうかきの葉もすっかり落ちつくして、秋も終り近くなりました。

ぼくは、いまでも、先生やみなさんのことを、一日もわすれたことはありません。先生のことを思うと、みなさんがうらやましくなります。

先生、おかわりありませんか。みなさんもお元気ですか。

ぼくは、こちらへきてから、おとなといっしょに畑にでたり、山へたきぎをとりにいったりするので、まえより元気で、からだもしっかりしてきました。ぼくがいまいる家は、山のふもとにある森の中の小さな農家ですが、家のまえをちょっとでると、はるか下の方に美しい湖がみえます。

秋晴れのすみきった空の下に、山のすがたが、さかさまに湖の中にうつって、がくにいれた



油絵のように美しくかがやいてみえます。

この湖へつりにいくのが、いちばんの楽しみです。ふながたくさんいます。四五十センチもあるこいもいます。いなもいます。それから、らいぎょもいます。らいぎょがふえてからは、ほかの魚がだんだんへってきたそうです。まえは、もっともっといろいろな魚がいたそうです。このほかに、大きな、黒くてひらたい貝がとれますので、なんども湖に近い川しもの方へとりにいきました。村の子どもがきょうそうでとりにいくので、たいそうにぎやかです。らいぎょは、大きなのになると、三十センチあまりもあります。三びきもとってくると、うちの家族七人が、じゅうぶんたべることができます。

ぼくは、先生やみなさんといっしょに、この湖へつりにいけたらと、いつも思っています。せめて、貝だけでもおみせしたいと思っています。

せんだって、はじめて畑のかいこんのおてつだいをしました。雑木林の一アールあまりのところです。母と、おばと、兄と、妹と、ぼくの五人で、三日間かかりました。はじめに、雑草をかりました。それから、雑木を切りたおしてかいこんしました。大きな木の根がたこの足のように四方にのびていましたので、木のかぶをほりかえすのは、よういではありませんでした。かずらの根をほるのも大へんでした。かずらの根は、二メートルあまりもはっているのがあって、ほねがお

れました。小さなぼくたちの畑がようやくかいこんされて、三日めにやっと、うねを十三本つくりました。

そうして、近所からわけてもらったさつまいものなえを、手わけして植えていきました。いもなえは、ぜんぶで三百五十本ありました。それは、七月の二十八日でしたが、村でいちばんおそい植えつけでした。

たきぎをとりにいく山は、ぼくの家からは十五六分ほど登るのですが、そこは、深い谷になっています。ここからは美しいかこうがんがとれます。大きなかこうがんの岩と岩とのあいだを流れ落ちるしみずが、せかれて、たきになり流れになって、村の中を通り、田んぼに落ち、湖にまでつづいています。

夏のあいだ、たきぎをせおって山からおりるとき、この谷まの流れにはいって、頭から水をあびるのが楽しみでした。また山へ登るほそ道の両がわに、まっかな、かわいらしい山いちごの実が、こぼれたように雑草の中にありました。手にとって口へいれると、つめたくてあまい味がしました。小さい妹のために、くわの葉につつんで持って帰ったこともありました。

ぼくははじめ、山へたきぎをとりにいくのが、すきではありませんでした。だいいち、じめじめした足もとがきみがわるく、そのうえ、くまざさやいろいろな名も知らない雑草がいちめんにはえていて、なにかでてきそうです。なん十メートルもある高いすぎやまつのはえているところは、昼でもうすぐらく、

日があたらないので、雨のふったあとのようにぬれています。かれえだならば、だれの山の木のえだでも、おってよいことになっています。高くて手のとどかないかれえだは、長い竹ざおのさきにかまをくくりつけて、ひっかけるようにして、下から力をいれてひきおろします。ポキンという音がして、ガサガサと落ちてくると、うれしくなります。母たちもぼくも、はじめ、その竹ざおにかまをつけて

やる方法を知らなかったので、えだぶりのよいかれえだのたくさんついている高い木をみつけると、兄かぼくがのぼる役をひきうけました。八九メートルもある木の上で、なたでえだをおろすのは気がつかれます。下からどんなに大きな声で話しかけられても、きこえないときがあります。上の方のかれえだをじゅんじゅんにたたき落し、足もとのえだをおろして、やっとおりてくると、からだじゅうがあせです。

一ど、すぎの木で、根もとからかれている高さ十五メートルに近い木にのぼったことがありました。のぼるたびにぐらぐら動くので、思わず木にしがみついたりしました。下では、兄や、母や、おばが、

「足もとをよくみて、気をつけてね。気をつけてね」
とか、
「そんな高いところ、あぶないから、早くおりておいで」
などいわれたが、ぼくはがんばっておりませんでした。木が動くので、かれえだはなかなかたたき落せませんでした。なたをふりおろすたびに、すぎの木は大きくゆれました。
すこし気がおちついてから、ぼくはあたりをみまわしますと、はるか向こうの山のはしから、美しい湖が半分ばかり顔をみせていました。また、下の方の山道を、しょいこをつけたおとなの人が、男か女かわからないが、下を向いて登ってくるのがみえます。道もないところから、木こりのすがたが

あらわれます。思わぬところに炭やき小屋があって、ゆるいけむりのあがるのがみえました。
秋になって、ぼくは山へいくのが楽しみになりました。だんだんたき木とりになれたのと、山へいくたびに、めずらしい小鳥がみつかるからです。ぼくたちがこの村へきたころは、湖には美しいしらさぎがたくさんまいおりていましたが、いつのまにどこへわたっていったのか、いまはもういなくなりました。

そのかわりまた、いつのまにかがんがわたってきました。かももきました。山には、つぐみや、ひわがきました。そのほか、名のわからない美しい小鳥がたくさんいます。

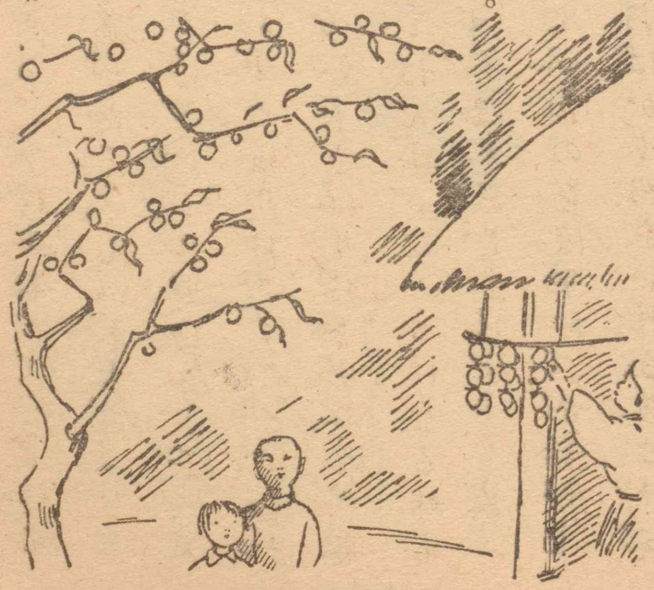
かきの色づくころ、畑のいもをほりおこしました。ぼくのうちでは、五日めごとにひとうねずつほりおこすことにしました。苦労してかいこんした畑のいもをほりおこすのは、楽しく、うれしいことでした。いちばん小さな三つになる妹もつれて、うちじゅうがみんなでいもほりをしました。

大きなうねのはだが地われしているのをほりおこすとき、むねがどきどきしました。母やおばがくわをいれるあとから、ぼくたちはむちゅうになっていもをひろいました。

こちらはかきの木の多いところで、どこの家にも、二本や三本はあります。ぼくたちのかりているやしきのまわりにも、大きなかきの木が三本あります。

朝早く庭にでて、つやつやした大きなかきが、ころころと二つ三つ落ちているのをみたときは、思わず手にとりあげます。

うちのかきはしぶがきですから、ほしがきにするために、母がかわをむいて竹ぐしにとおし、のき下につるしてくれます。



妹は、かきの葉を「きれいだ、きれいだ」といってひろい集めては、ままごとをして遊びます。母やおばまで子どものように、かきの葉を一まい一まいならべて、この色がよいとか、こちらの色がよいとかいってながめています。いつのまにか葉がすっかり落ちつくしてはだかになった木の上に、まっかにじゅくした実がすずなりになっているのをみると、いまにものぼってとりたくなります。

この夏、一ど、用事でおばがそちらにでかけるとき、ぼくもついていったのでした。ぼくはみなさんにあってお話がしたいと思いましたが、いそぐ用事だったので、先生にだけお目にかかってすぐ帰りました。

おばに、「小公子」をよんでもらいました。おばは、「小公子」の話にでてくる、セドリック少年のように、子どものころから、世の中のことに注意を向けるようにといわれました。ぼくは、おとうさんのやっていたパン屋のしごとを、しんけんにやろうと思っています。兄は、大きくなって農業をするために、いま知りあいの家でみならいをしています。

「小公子」のセドリックは、七つ八つのころでも、せんきょのことを話していますけれども、ぼくにはまだ、セドリックほどわかりません。先生、「小公子」をみなさんにお話してあげてください。

ぼくは、この手紙を数日もまえから、喜んで書きだしました。もう、遠くの山々のいただきに、白い雪のぼうしがみえます。なつかしいそちらの山々の景色を思いだします。天気のよい日は、あの広い学校の運動場で、先生とみなさんが、ゆかいに遊んでいるだろうと思います。

先生、みなさん。楽しく元気で勉強してください。

さようなら

六　どんぐりとやまねこ

おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、いちろうのうちにきました。

「かねたいちろうさま。　九月十九日。

あなたは、ごきげんよろしいそうで、けっこうです。

あした、めんどうなさい判をしますから、おいでなさい。

とび道具を持たないでください。　やまねこ拝」

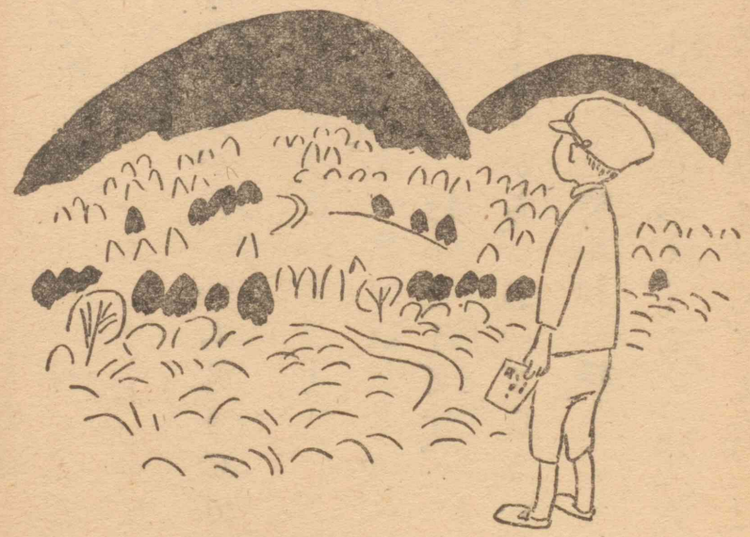
字はへたで、すみもがさがさして指につくくらいでした。

けれども、いちろうはうれしくてたまりませんでした。はが

きをそっと学校のかばんにしまって、うちじゅうを、とんだりはねたりしました。

ねどこにもぐってからも、やまねこのにゃあとした顔や、そのめんどうだというさい判のようすなどを考えて、おそくまでねむれませんでした。

けれども、いちろうが目をさましたときは、もうすっかり明かるくなっていました。



おもてにでてみると、まわりの山は、みんな、たったいまできたばかりのように、きれいにもりあがって、まっさおな空の下にならんでいました。いちろうは、いそいでごはんをたべて、谷川にそった小道を、上の方へ登っていきました。

すきとおった風がザアッとふくと、くりの木はバラバラと実を落しました。いちろうはくりの木をみあげて、

「くりの木、くりの木。やまねこがここを通らなかったかい。」

とききました。くりの木は、ちょっとしずかになって、

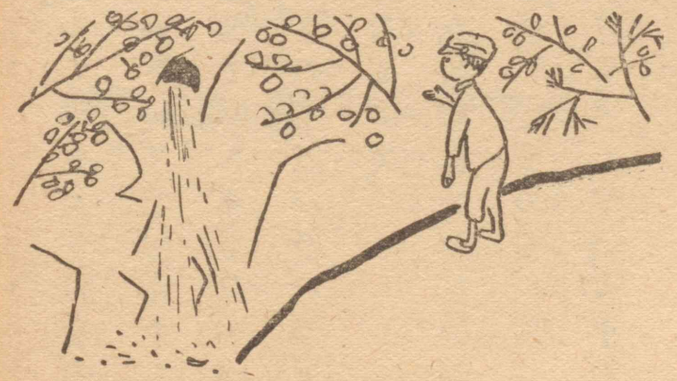
「やまねこなら、けさ早く馬車で、東の方へとんでいきましたよ。」

と答えました。

「東なら、ぼくのいく方だねえ。おかしいな。とにかく、もっといってみよう。くりの木、ありがとう」。

くりの木は、だまってまた実をパラパラと落しました。

いちろうは、すこしいきますと、そこはもう、「ふえふきのたき」でした。「ふえふきのたき」は、まっ白な岩のがけの中ほどに、小さなあながあいていて、そこから水がふえのように鳴ってとびだし、すぐたきになって、ゴウゴウと



谷に落ちていました。

「おいおい、ふえふき。やまねこがここを通らなかったかい」。

たきがピーピー答えました。

「やまねこなら、さっき馬車で、西の方へとんでいきましたよ」。

「おかしいな。西なら、ぼくのうちの方だ。けれども、まあ、もうすこしいってみよう。ふえふき、ありがとう」。

たきは、またもとのようにふえをふきつづけました。

いちろうがまたすこしいきますと、一本のぶなの木の下に、たくさんの白いきのこが、ドッテコドッテコと、へんな楽隊をやっていました。

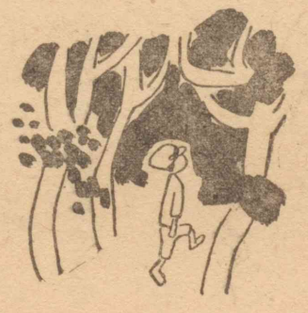
いちろうは、からだをかがめて、

「おい、きのこ。やまねこがここを通らなかったかい。」
とききました。すると、きのこは、
「やまねこなら、けさ早く馬車で、南の方へとんでいきました。」
と答えました。
いちろうは、首をひねりました。
「南なら、あっちの山の中だ。おかしいな。まあ、もうすこしいってみよう。きのこ、ありがとう。」
きのこはみんないそがしそうに、ドッテコドッテコと、へんな楽隊をつづけていました。
いちろうが、またすこしいくと、一本のくるみの木のこず

えを、りすが、ぴょんぴょんととんでいました。いちろうは、すぐ手まねきして、それをよびとめて、
「おい、りす。やまねこがここを通らなかったかい。」
とたずねました。すると、りすは、木の上からひたいに手をかざして、いちろうをみながら答えました。
「やまねこなら、けさまだくらいうちに、馬車で、南の方へとんでいきましたよ。」
「南へいったなんておかしいなあ。けれども、まあ、もうすこしいってみよう。りす、ありがとう。」
りすはもういませんでした。ただ、くるみのいちばん上のえだがゆれ、となりのぶなの葉がちょっと光っただけでした。

いちろうがすこしいきましたら、谷川にそった道は、もうほそくなってきえてしまいました。そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木の森の方へ、新しい小さな道がついていました。

いちろうは、その道を登っていきました。かやのえだはまっ黒にかさなりあって、青空は一きれもみえず、道はたいへんきゅうな坂になりました。いちろうは、顔をまっかにして、あせをぽとぽと落しながら、その坂を登りますと、にわかにぱっと明かるくなって、目がちくっとしました。そこは美しいこがね色の草地で、草は風に



ザワザワ鳴り、まわりは、りっぱなオリーブ色のかやの木の森でかこまれていました。

その草地のまん中に、せいのひくい、おかしなかっこうの男が、ひざをまげて、手に皮のむちを持って、だまってこっちをみていたのです。

いちろうは、だんだんそばへいきましたが、びっくりしてたちどまってしまいました。その

男はかた目でした。そうして、みえない方の目は、白くびくびくうごき、足もひどく曲がってやぎのようですし、ことに、その足さきは、しゃもじのようなかたちだったのです。いちろうは、きみがわるかったのですが、なるべくおちついてたずねました。

「あなたはやまねこを知りませんか」。

すると、その男は、横目でいちろうの顔をみて、口を曲げて、にやっとわらっていいました。

「やまねこさまは、いますぐにここへもどっておいでになるよ。きみは、いちろうさんだな」。

いちろうはぎょっとして、ひと足うしろにさがって、

「ええ、ぼく、いちろうです。けれども、どうしてそれを知っていますか」。

といいました。すると、そのきたいな男は、

「それなら、はがきをみたろう」。

「みました。それできたんです」。

「あの文章は、ずいぶんへただったろう」。

と、男は、下を向いて、かなしそうにいいました。

いちろうは気のどくになって、

「さあ、文章はなかなかうまいようでしたよ」。

といいました。男は、喜んで、息をハアハアさせて、耳のあたりまでまっかになり、着物のえりを広げて、からだに風を

いれながら、
「あの字もなかなかうまいか」。
とききました。いちろうは、思わずわらいだしながら返事をしました。
「うまいですね。四年生だってあんなには書けないでしょう」。
すると、男はまたいやな顔をしました。
「四年生というのは、小学校の四年生だろう」。
その声が、あんまり力がなく、あわれにきこえましたので、いちろうはあわてていいました。
「いいえ、大学の四年生ですよ」。
すると、男は、また喜んで、顔じゅう口のようにして、に

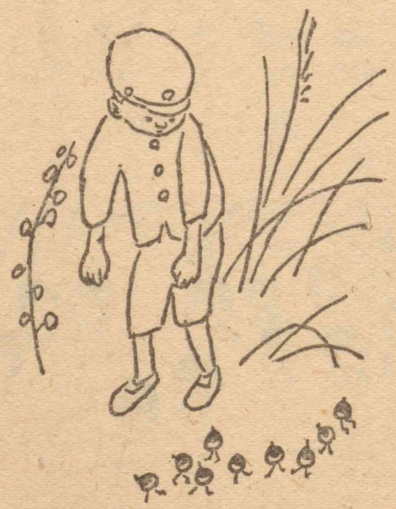
たにたわらっていいました。
「あのはがきは、わしが書いたのだよ」。
いちろうは、おかしいのをこらえて、
「いったい、あなたはたれですか」。
とたずねますと、男は、きゅうにまじめになって、
「わしはやまねこさまのぎょしゃだよ」。
といいました。
そのとき、風がどうとふいてきて、草はいちめんに波だち、ぎょしゃはきゅうにていねいなおじぎをしました。
いちろうは、おかしいと思ってふり返ってみますと、そこに、やまねこが、黄色なじんばおりのような物を着て、みど

り色の目をまんまるにして立っていました。やっぱりやまねこの耳は立ってとがっているな、と思いながらみていると、やまねこは、ひげをぴんとひっぱって、はらをつきだしていいました。

「きょうはよくきてくださいました。じつは、おとといからめんどうなあらそいがおこって、ちょっとさい判にこまりましたので、あなたのお考えをうかがいたいと思いましたのです。まあ、

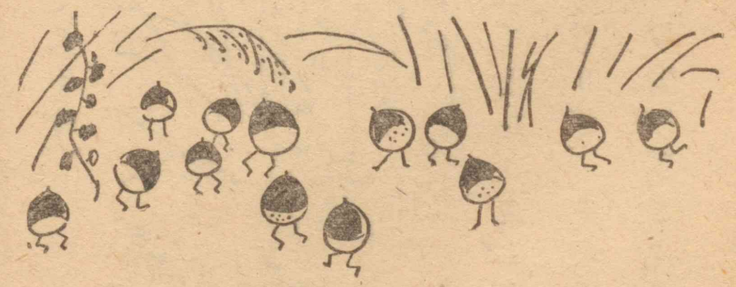
ゆっくりお休みください。じき、どんぐりどもがまいりましょう。どうも、毎年このさい判で苦しみます。」

そのとき、いちろうは、足もとでパチパチしおのはねるような音をききました。びっくりしてかがんでみますと、草の中に、あっちにもこっちにも、こがね色のまるいものが、ぴかぴか光っているのでした。よくみると、これはみんな赤いズボンをはいたどんぐりで、その数といったら、三百でもきかないほどでした。ワアワアとみんななにかいっているのです。



「あ、きたな。ありのようにやってくる。おい、さあ早くベルを鳴らせ。きょうは、そこが日あたりがいいようだから、そこんとこの草をかれ」。

やまねこは、大いそぎでぎょしゃにいいつけました。ぎょしゃもたいへんあわてて、こしから大きなかまをとりだして、ザックザックとやまねこのまえのところの草をかりました。そこへ四方の草の中から、どん



ぐりどもがぎらぎら光ってとびだして、もうワアワアいっていました。

ぎょしゃは、こんどは、すずをガランガラン、ガランガランとふりました。すずの音は、かやの森にガランガラン、ガランガランとひびき、こがね色のどんぐりどもは、すこしずつしずかになりました。みると、やまねこは、もう、いつか黒い、長いしゅすの服を着て、どんぐりどものまえにすわっていました。ぎょしゃは、こんどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴らしました。

「さい判も、もうきょうで三日めだぞ。いいかげんになかなおりをしたらどうだ」。

やまねこがすこし心配そうに、それでもむりにいばっていいますと、どんぐりどもは、口々にさけびました。

「いいえ、だめです。なんといったって、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。そうして、わたくしがいちばんとがっています」。

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです」。

「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいから、わたしがいちばんえらいんだよ」。

「いや、ちがうよ。わたしのほうがよっぽど大きいって、きのう判事さんがおっしゃったじゃないか」。

「だめだい、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ」。

「おしあいの強いものだよ。おしあいしてきめるんだよ」。

もうみんなガヤガヤ、ガヤガヤいって、なにがなんだか、まるではちのすをつついたようで、わけがわからなくなりました。そこで、やまねこがさけびました。

「やかましい、ここをなんと心えるる。しずまれ、しずまれ」。

ぎょしゃがむちをヒュウパチッと鳴らしましたので、どんぐりどもはやっとしずまりました。やまねこはぴんとひげを

ひねっていいました。

「さい判も、もうきょうで三日めだぞ。いいかげんになかなおりをしたらどうだ」

すると、また、どんぐりどもが口々にいいました。

「いえいえ、だめです。なんといったって、頭のとがったものが、いちばんえらいんです」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです」

「ちがうよ。大きなことだよ」

ガヤガヤ、ガヤガヤ、また、なにがなんだかわからなくなりました。やまねこがさけびました。

「だまれ、やかましい。ここをなんと心える。しずまれ、しずまれ」

ぎょしゃが、むちをヒュウパチッと鳴らしました。やまねこが、ひげをひねっていいました。

「さい判も、もうきょうで三日めだぞ。いいかげんになかなおりをしたらどうだ」

「いえいえ、だめです。頭のとがったのが——」

ガヤガヤ、ガヤガヤ——やまねこがさけびました。

「やかましい。ここをなんと心える。しずまれ、しずまれ」

ぎょしゃがむちをヒュウパチッと鳴らし、どんぐりはみんなしずまりました。やまねこがいちろうにそっと申しました。

「このとおりです。どうしたらいいでしょう」

いちろうはわらって答えました。

「そんなら、こういいわたしたらいいでしょう。この中で、いちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなってないのがえらいとね」。

やまねこは、なるほどというようにうなずいて、それから、いかにも気どったようすで、しゅすの着物のえりを開いて、黄色のじんばおりをち

ょっとだして、どんぐりどもに申しわたしました。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたしだ。この中で、いちばんばかで、めちゃくちゃで、てんでなってなくて、頭のつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ」。

どんぐりどもは、しいんとしてしまいました。それはそれはしいんとして、だまってしまいました。

そこで、やまねこは、黒いしゅすの服をぬいで、ひたいのあせをぬぐいながら、いちろうの手をとりました。ぎょしゃも、大喜びで、五六ぺん、むちをヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴らしました。やまねこは、

「どうもありがとうございました。これほどのひどいさい判を、

まるで一分半でかたづけてくださいました。どうかこれから、わたしのさい判所のめいよ判事になってください。これからも、はがきがいったら、どうかきてくださいませんか。そのたびにお礼はいたします。」

といいました。

「しょうちしました。お礼なんかいりませんよ。」

「いいえ、お礼はどうかとってください。わたしの人格にかかわりますから。そうして、これからは、はがきに、かねたいちろうどのと書いて、こちらをさい判所としますが、ようございますか。」

「ええ、かまいません。」

といいますと、やまねこは、まだなにかいいたそうに、しばらくひげをひねって、目をぱちぱちさせていましたが、どうとう決心したらしく、いいだしました。

「それから、はがきのもんくですが、これからは、用事これあるにつき、明日出頭すべし、と書いていいでしょうか。」

いちろうはわらっていいました。

「さあ、なんだかへんですね。それは、やめたほうがいいでしょう。」

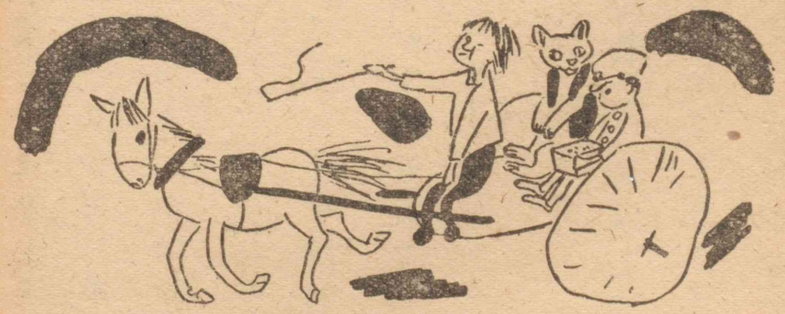
やまねこは、どうもいいようがまずかった、いかにもざんねんだというふうに、しばらくひげをひねったまま下を向いていましたが、やっとあきらめていいました。

「それでは、もんくはいままでのとおりにしましょう。そこ
できょうのお礼ですが、あなたは、こがねのどんぐり二リッ
トルと、しおざけの頭と、どちらがおすきですか」。
「こがねのどんぐりがすきです」。
やまねこは、さけの頭でなくてまあよかったというふうに、
口早にぎょしゃにいいました、
「どんぐりを二リットル早く持ってこい。二リットルにたり
なかったら、めっきのどんぐりもまぜてこい、早く」。
ぎょしゃは、さっきのどんぐりをますにいれて、はかって
さけびました。
「ちょうど二リットルあります」。

やまねこのじんばおりが、風にバタバタ鳴りました。そこ
で、やまねこは、大きくのびあがって、目をつぶって、半分
あくびをしながらいいました。
「よし、早く馬車のしたくをしろ」。
白い、大きなきのこでこしらえた馬車が、ひっぱりだされ
ました。そうして、なんだかねずみ色のおかしなかたちのう
まがついています。
「さあ、おうちへお送りいたしましょう」。
やまねこがいいました。ふたりは馬車に乗り、ぎょしゃは
どんぐりのますを馬車の中にいれました。
ヒュウパチッ。馬車は草地をはなれました。木ややぶが、

けむりのようにぐらぐらゆれました。いちろうは、こがねのどんぐりをみ、やまねこは、とぼけた顔つきて遠くをみていました。

馬車がすすむにしたがって、どんぐりはだんだん光がうすくなって、まもなく馬車がとまったときは、茶色のどんぐりにかわっていました。そうして、やまねこの黄色のじんばおりも、ぎょしゃも、きのこの馬車も、一どにみえなくなって、いちろ



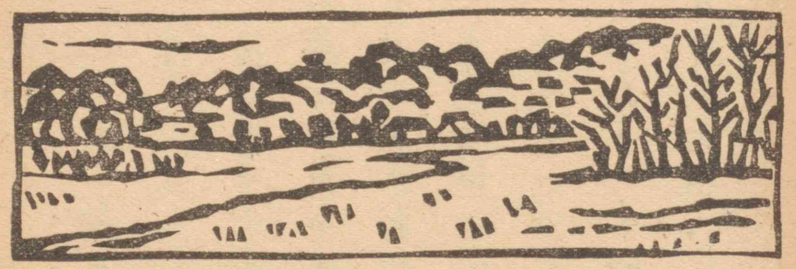
うは、自分のうちのまえに、どんぐりをいれたますを持って立っていました。

それからあと、「やまねこ拝」というはがきは、もうきませんでした。やっぱり、「出頭すべし」と書いてもいいといえばよかったと、いちろうはときどき思うのです。

七　貝づか

みんなで、学校から四キロほどある貝づかへいきました。先生が、町角までいって、待っているようにとおっしゃったので、めいめい、シャベルや移植ごてなどを持って、角のむきみ屋のところに集まっていました。

おかみさんが、店の人とふたりで、せっせと貝をこじあけて、むきみをつくっていました。みるまに、貝がらの山が家のまえにできます。先生が、リヤカーに、はこやかごなどをのせておいでになりました。



「ごらんなさい。いまでもこうやって、人は貝をたべています。

むかしといっても大むかしのことだが、貝などをおもにたべていたときがあったらしい。その貝がらをすてたところが、きょうこれからいく貝づかですよ」。

先生について、五十人のなかまが、おくれないように歩いていきました。平らな畑やたんぼの向こうに、一だん高くなったところがみえます。

「むかし、このへんは、波のおだやかな海

のいりえだったのです。そう、あの向こうの小高いところに、白い物がちらちらとみえるでしょう。あれが貝づかです。」

もうすこしで貝づかに着くというところで、先生は一けんの農家にたちよられました。しばらくして、そこの主人といっしょにでておいでになりました。

「きょうは、このかたの畑をすこしほらせてもらうことにします。」

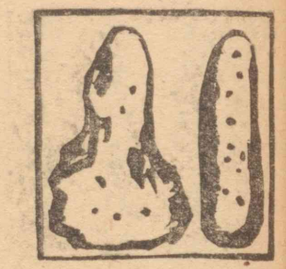
主人も、くわや、ふごや、かごなどを持ってきて、かしてくれました。

そこへ着くと、先生はステッキを深く土の中へお立てになりました。土はやわらかで、ずぶずぶと、ステッキのたけいっぱいにはいります。

「ここが、このあいだからよくお話していた貝づかです。この土の上に白くみえているのは、むかし海の中にいたいろいろな貝のからです。

むかしの人は、貝がらといっしょに、いらなくなったりこわれたりした道具や、たべたけもののほねや、角などを、ここへすてました。それで、ここをほると、そういうものがみつかることが

あるのです。ひとつこれからほってみることにしましょう。」
私たちは、もう、ほってみたくてうずうずしていました。
「まあ、おちついて、ゆっくりしごとにかかりましょう。まずどんなふうにほりますか。」
「ありそうなところをほってみます。」
「ありそうなところって、どんなところでしょう。」
「――」
「それはちょっとわかりませんね。もし、手あたりしだいにやって、ぐあいよくなにかをほりあてたらいいが、ただ、あっちこっちほってみて、なんにもみつからないと、だめだと思ってやめてしまう。これがふつうです。」



「ぼくは、どこか一つのところをきめて、広く深くほっていくのがいいと思います。」
「それがよさそうだね。それではまず、一メートルぐらいのはばで、東西に四五十メートルほってみることにしよう。貝や石ころは、どれか一つのかごにいれておこう。」
そこでみんなは、ほりだしました。
「なんにもないぞ。」
「だめだな、ここは。」
「先生、ここは貝ばかりですよ。」
口々にこんなことをいうのを、先生は、耳にもおいれにな

らないで、ひとりでたんねんにほっておいでになります。ぼくらは、ときどき手をとめて、そこをのぞきにいってみると、先生のかごの中には、いつのまにか、せきふらしい物、土器らしい物、ただのわり石のような物などがたまっています。

「先生のところは、いろいろでるらしいぞ。」

「ここからも、でるかもしれないぞ。」

「いっしょうけんめいやってみよう。」

私たちは、だんだんしんけんになってほりました。

「そら、これはせきふらしいぞ。」

「そうだ、たしかにそうだ。先生のところにあるのと同じだね。」

「おや、これはなんだろう。はりみたいだね。」

「ほねで作ったものらしいよ。ぼく、先生におたずねしてみよう。」

私はかけていって、先生におたずねしますと、

「よくみつけたね。あとでよくみてあげるから、かごにいれてとっておきなさい。」

と、しずかにおっしゃいました。

「せとものかけらみたいなものがあるじゃないか」。

先生がまわっておいでになりました。

「これかね。これはじょうもん土器といって、貝づかからでる物では、いちばん多い土器です。とっておきなさい。」

だれもかれも、あせを流し、顔をまっかにしてほっています。

先生のふえが鳴りました。みんなはほる手をとめました。

「これで三十分ほりました。わたしは、なんにも説明しなかったが、みなさん自身で、だんだんいろいろなことを知ってくると思います。みなさんのひろった物の中に、いのししやしかの角などに手を加えて、なにかの道具につかった物があったでしょう。それには、こんなはりや、もりなどがあります。

石で作ったもの、それには石のやじり、おもりなどいろいろあります。ここからでるのは、このとおりうちくだいて作った物で、つるつるみがかれていないから、ただのわり石のようにみえる物もあります。

それから土器。これはじょうもん土器という種類で、こんなただのせとものかけらがと思うような物ですが、これはたいせつな物だから、どんな小さなかけらでも、ひろっておきなさい。さあ、あと三十分ほってみましょう」。

もう、むだ口をきく人は、ひとりもありませんでした。四人が話しあってしらべ、へんだと思う物は、みなかごの中にいれておきました。

ピリピリッとふえが鳴りました。あとの三十分は、ひじょうにみじかく思われました。

「かごをこのリヤカーにつみなさい。それから、道具を集めて、めいめい持ってきた物があるか、おしらべなさい。いずれ学校へ帰ってから、もう一ど整りしましょう。」

帰りは、みんなかわるがわるリヤカーをおして歩きました。

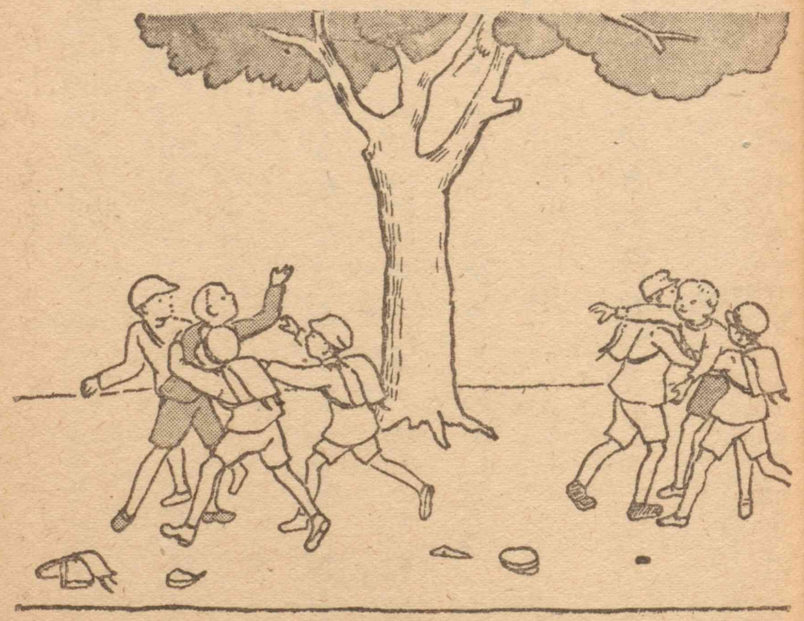
八　なかよし

とき　ある晴れた日の午後

ところ　学校の帰り道

人　たかぎ・やまだ　そのほか友だち大ぜい

ぶたいの中ほどに大きな



木が一本立っている。

「おい、よしたまえ」。「よせったら」。「だめだよ、きみ」。——けんかをとめる声がつづく。まくがあく。

たかぎとやまだが左右にひきわけられたところである。たかぎには友だちの一、二、三、やまだには四、五、六、そのほか数人が、それぞれにわかれてふたりをひきとめている。

一　「よせよ、たかぎくん」。

四　「さあ、やまだくん、これでひきわけだ」。

やまだ　「いやだい」。と、たかぎをにらみつける。

たかぎ　「ぼくだっていやだ」。と、つかまれている手をふりはなそうとする。

二　「まだやるのか」。

たかぎ　「やるとも」。

三　「よせよ。どうしたんだい。あんなになかのいいふたりが」。

五　「へんだよ。ふたりとも——さあ、いいかげんにして帰ろうよ。ね、やまだくん」。と、つれていこうとする。

やまだ　「はなしてくれったら、ぼくはやるよ」。

たかぎ　「ぼくだってやるよ。さあこい」。

ふたりともむきになって、友だちの手からぬけだそうともがく。

みんなでそれをおしとめる。

一　「もういいったら――」。

四　「みっともないよ。学校の帰りじゃないか――」

二　「たかぎくん、帰ろうよ」。やまだをかこんでいる友だちに、

「さあ、きみたち、やまだくんをつれていけよ」。

六　「うん」。やまだの手をひっぱって、「いこうよ、やまだくん」。

やまだ　ひっぱられながら、「もうきみとは遊ばないからな」。

たかぎ　「いいとも、だれがきみなんかと遊ぶもんか――」

五　「もういいったら――」と、やまだのせなかをおしながらさる。

そのほかの友だちが、落ちているやまだのかばんやぼうしをひろってあとにつづく。一、二も、たかぎの落した物を集める。

三　たかぎの服のほこりをはらいながら、「どうしてけんかなんかしたのさ」。

一　「びっくりしたよ。いっしょに歩いているうちに、きゅうにつかみあいをはじめるんだもの」。

二　「もういいじゃないか、そんな話――たかぎくん、いこうよ」。

友だち、たかぎをかこみながらさる。

そのあと、学校帰りの女の子ふたり、通りすぎる。まもなく、一、二年ぐらいの男の子、大きな声で、「七、八、九、十」と数えながら、大またでぴょんぴょんかけてきて、「十」でとまる。うしろを向いてじゃんけんをする。こんどは負けたらしくたちどまって待っている。勝った子が、「一、二、三――」と数えながらぶたいのはしまできてとまる。

またじゃんけんをする。こうしてふたり、じゅんじゅんに

ぶたいをさる。しばらく、間――

やまだ、さがし物のようすで地面をみながらでてくる。なかなかみつからない。そのうちに、セルロイドの三角じょうぎをひろいあげる。しかし、自分の物ではないので、それをぶたいのおくになげすてて、なお、あちこちさがしつづけながらさる。

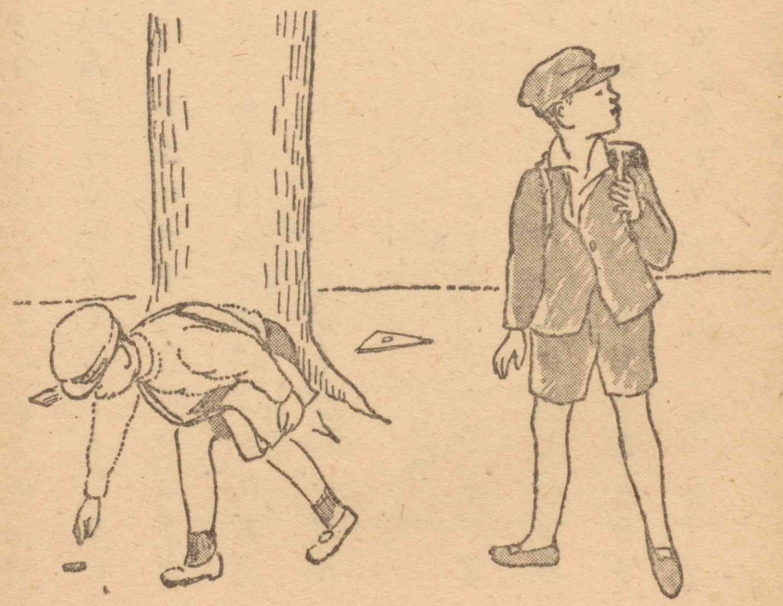
しばらくすると、たかぎもさがし物のようすでてくる。首がいたいらしく、手でさすっている。そのうちに新しいすみをひろいあげるが、自分の物ではないので、なおあたりをさがしている。

そこへやまだが帰ってくる。両方ともあいてに気がつくが、

わざと知らないふりをしている。

たかぎ　しばらくして持っているすみに気がつき、ちょっとためらったのち、「これ、きみのだろう」。

やまだ、はなれたまま、たかぎの手もとをみている。さがしていたすみである。受けとりにくい気持でいる



が、やがて思いきって、たかぎのそばにより、だまったままそれをとりあげる。そうしてさっさといきかけるが、ぶたいはしで足をとめる。

やまだ　わざとたかぎの顔をみないようにして、「きみはなにをなくしたんだ」。

たかぎ、ちょっとやまだの方をみるが、返事をしないでさがし物をつづける。

やまだ　「じょうぎだろう」。

たかぎ　「なんだっていいじゃないか。よけいなおせっかいさ」。

やまだ、おこっていきかけるが、思いなおして、さっきすてたじょうぎをひろってくる。

やまだ　たかぎのまえにじょうぎをつきだして、「きみの名まえが書いてある。」

たかぎ　「あっ、それだ。」と喜ぶが、やまだの顔をみると、きゅうにまたつんとなって、だまってそれをとり、かばんにいれる。そのあいだに、やまだがいきかける。そのうしろすがたをみて、「ちょっと待て。」

やまだ　「なんだ。」と立ちどまる。

たかぎ　ぶたいのすみからボタンをひろってくる。「これきみが落したボタンだろう。」

やまだ　「落したんじゃない。きみがむしりとったんじゃないか。」と、ボタンをとる。

たかぎ　「首をひっかいたからさ。」

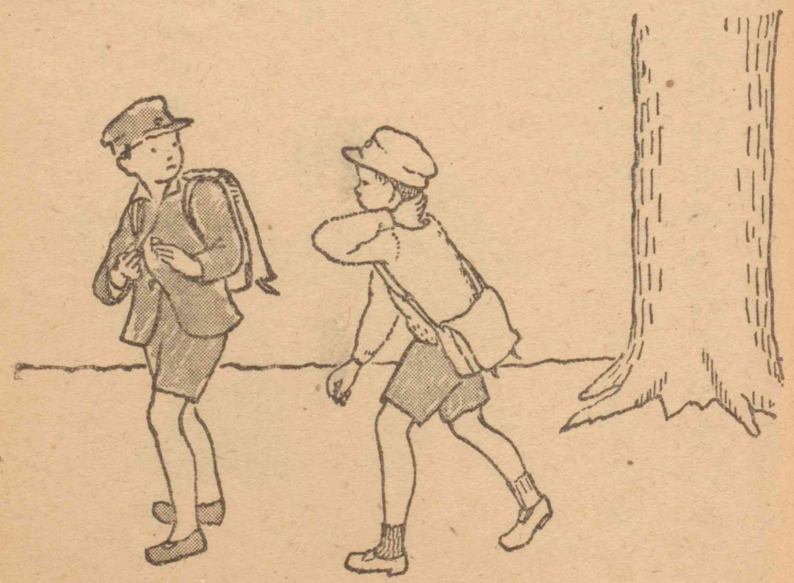
やまだ、ボタンをちぎれた服の糸にむすびつけようとする。

たかぎ、それをのぞきこむ。

やまだ、みせまいとしてからだをねじってかくす。たかぎ、首をさすりながら、その場にぼんやり立っている。

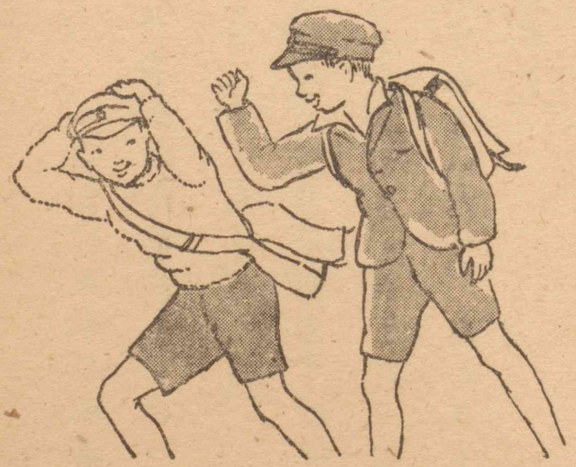
やまだ　ちょっとたかぎをみて、「おい。」

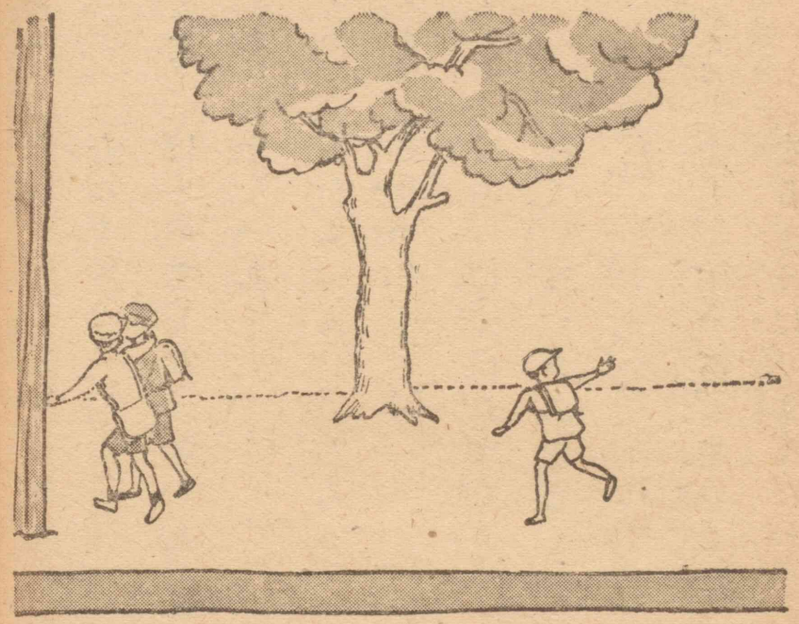
たかぎ　「なんだ。」



やまだ「首、いたいのか」。
たかぎ　ぶっきらぼうに、「いたかない」。
ふたりだまる。たかぎ、うしろの木をひとまわりして、そっとやまだに近づく。
たかぎ「おい、ボタンついたか」。
やまだ「つかなくたって、いいよ」。
たかぎ「でも、あいこだ」。
やまだ「なにかあいこだ」。
たかぎ「すみをひろってやったじゃないか」。
やまだ「ぼくだって、じょうぎをみつけてやったじゃないか」。
たかぎ「だから、あいこだ」。

やまだ「でも、きみはひどいよ。このボタンをみたまえ」。とむねをみせる。
たかぎ「ぼくの首をひっかいたのはだれだ」。と、首をさする。
やまだ「そりゃあ——」
たかぎ「だから、あいこだろう」。
やまだ「そりゃそうさ」。
たかぎ「でも、ぼくは二つなぐられて、三つきみをなぐった」。
やまだ「よし、じゃあ、あいこになるように、もう一つな





ぐってやる。」と、げんこをかためて右手をふりあげる。

たかぎ「もうたくさんだ。」

たかぎ、頭をかかえてにげるまねをする。やまだ、思わずわらいだす。たかぎもわらう。

たかぎしずかに、「でも、いやだな、けんかしたあとの気持って。」

やまだ「ぼくもそうさ。」

たかぎ「きみ、もうよそうよ。」

やまだ「かんにんするかい。」

たかぎ「いや、ぼくがいけなかったのさ。」

やまだ「ぼくもわるかったよ。」

たかぎ「いったい、なんでけんかをはじめたんだろう。」

やまだ「つまらないことさ。ぼくがあんまりじまん話をするもんだから——」

たかぎ「あ、そうそう。それで、ぼくも負けまいと思ったんだ。じまん話をはじめると、自分がいちばんりっぱだと思うもんだね。なんだか、いま考えるとはずかしい気持

さ。」

やまだ「友だちにまで心配させて——」

たかぎ「いっしょにあやまろう、あした——ねえ、きみ、うちによって、ねえさんにそのボタンをつけてもらわない。」

やまだ「けんかの話をするのかい。」

たかぎ「してもいいさ。」

やまだ「そう、してもいいね。」

たかぎ「じゃあ、いこう。」

やまだ「首は——」

たかぎ「なかなおりしたら、よくなった。」

やまだ たかぎの首をのぞきながら、「でも、みてあげよう。」

たかぎ「だいじょうぶだよ。さあ、いこう。」

やまだ「いこう。」

ふたり、なかよくかたを組みながらさる。

——まく——

九　山のスキー場

ぼくたち四十人は、のだ先生といしい先生につれられて、山のスキー場へいった。

まえの日に、こな雪がたくさんふったので、スキーをするには、ちょうどよかった。

集合地は、村はずれの一本すぎのそばであった。ぼくた

ちは、リックサックをせおって、スキーをつけ、二本のつえをつきながら、そこへ集まった。

「みんなそろったね。さあ、でかけよう」。

と、のだ先生が先頭に立たれ、いしい先生は、みんなのあとからこられた。

はじめは二列ですすんだが、谷あいでは一列になったので、ずいぶん列が長かった。だんだんのぼり坂になると、からだがほてってあせがでる。みんなだまって、あえぎながら登っていった。スキーの雪をすべる音だけが、気持よくきこえる。きゅうな坂にかかると、まえの方で、のだ先生が、

「さあ、元気をだして」。

と、大きな声をかけられる。いしい先生も、ずっとうしろの方から、

「しっかり登れ」

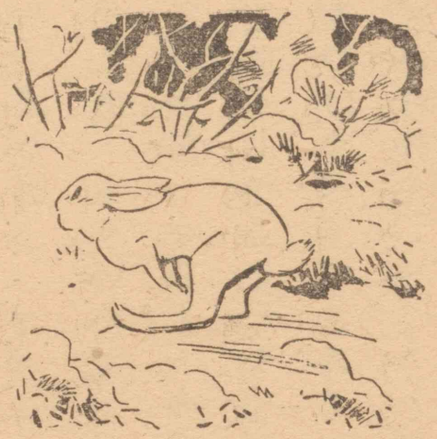
とさけばれた。その声にはげまされて、ぼくたちは、いっしょうけんめいに登っていった。

まつ林の中を通っていくとき、だれかが、

「やあ、うさぎ、うさぎ」

と、大声にさけんだ。みると、大きなうさぎが、ちょうど小

まつの中へとびこんだところであった。



「あれがスキー場だ。もうひと息」

と、のだ先生がつえでさされる方をみると、なるほどりっぱなスキー場で、ジャンプ台もみえる。みんなは喜んで、きゅうに元気をだした。

いよいよ、スキー場に着いた。いかにもすべりよさそうなけいしゃが、長くつづいている。

「先生、まだすべってはいけませんか」

「先生、もうすべらしてください」

と、みんながいうと、

「待て、待て、もうすこし上までいこう」。

と、いしい先生がうしろの方から追いたてるようにいわれた。

百五十メートルほど登ったとき、ぼくが、

「先生、もういいでしょう」。

といった。すると、のだ先生が、

「ようし、ここからすべりたいものはすべってよろしい」。

といわれた。

ぼくたち三四人は、列をはなれて、ま一文字にすべりおり

た。すばらしい早さに、からだもスキーも一つになって、ビュウとうなる。まるで、空中かっそうをしているようだ。ふもとへきて、急停止すると、ぱっと雪けむりが立ち、あせばんだ顔に、雪のこながふりかかる。

やがて、十人、二十人、つぎつぎにすべりはじめた。思い思いに、スキーのあとを雪の上にえがきながら、小鳥のようにおりてくる。とちゅうでころんで、雪だるまになっておきあがるものもある。にこにこわらいながらおりてくるもの、まじめな顔でやってくるものなどさまざまである。みんなが急停止をすると、雪けむりが一どにあがった。

先生は、ふたりとも、まだ上へ上へと登っていかれたが、

三百五十メートルも登ったところで、つえをあげて、「さあ、おりるよ」。というあいずをされた。ぼくたちも、みんなつえをふって、それに答えた。

のだ先生がさきに、すぐつづいていしい先生がすべられる。そのみごとなすべりぶりにみとれていると、先生たちは、もう目のまえにこられた。はげしい制動をかけられると、もうもうと雪けむりが立つ。雪けむりがきえて、先生のえ顔がうかぶ。

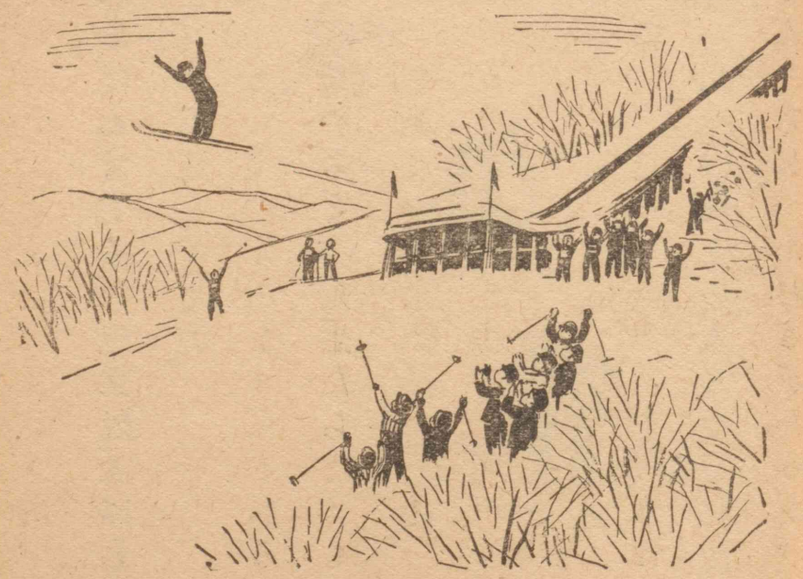
それから、ぼくたちは、登っていってはすべり、おりてはまた登った。

ジャンプ台では、じょうずな人たちが、かわるがわるジャ

ンプをしている。

「おうい。先生がジャンプをなさるそうだ。」

と、だれかがさけんだ。みんなそこへいくと、いま、いしい先生がすべられるところである。たちまち先生のからだは、ちゅうにうかんだ。両手をひろげて高くとばれるすがたは、なんという勇ましさであろう。みんなは思わず手を



たたいた。

こんどは、のだ先生がとばれるばんである。先生は、はちまきをして、すべりだされた。すばらしい早さだ。

「すごい。」

先生のからだは、美しくちゅうをとんでいく。

「ばんざい。」

と、だれかがさけんだ。

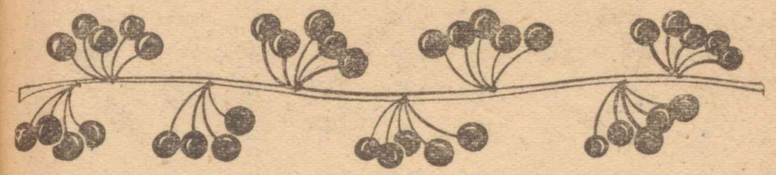
「のだ先生。」

と、だれかがさけんだ。

四十メートルも空中をとんで、先生は地上の人となられた。お昼になったので、雪の上で楽しくおべんとうをたべた。

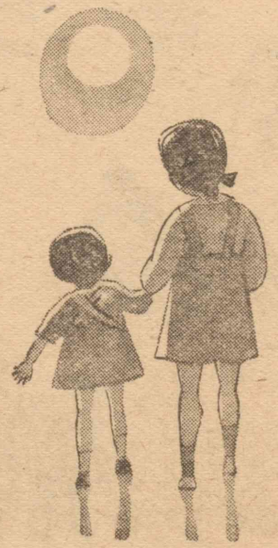
午後は、先生について、ひとりひとり、正しいすべりかたを教えていただいた。

帰りは、村までくだりの坂道だ。林をぬって長いきょりをすべるのは、ほんとうにゆかいであった。

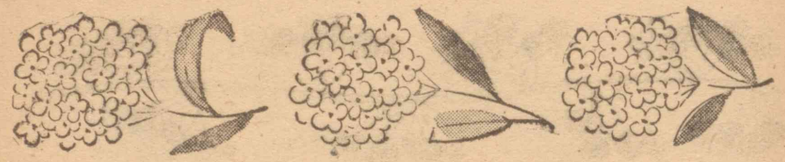


十　ちよ紙

いもうとの小さき歩みいそがせてちよ紙かいにゆく月夜かな



水ぐるま近きひびきにすこしゆれすこしゆれいるこでまりの花



いまの鳥はこの木にいるにちがいなしひそかにえだ葉の中をみあぐる

着ぶくれて歩かされいし女の子はたんとたおれそのままなくも

赤いぬの一ぴきゆけばこの町のそこここよりぞい

ぬのあらわる

階上のわが電燈のきえにけりみわたす家々みなまくらなり

屋根の雪かきおとしいる少年の顔の明かるさ日のてる中に

ちろちろと岩つたう水にはい遊ぶ赤きかにいてすぎの山しずか

青ざさをいれやりたればいけのふなはや青き葉のかげにきておる

たべのこしのめしつぶまけばうちつどうすずめの子らと日なたぼこする

ふくじゅそうのはちをおきかうるおさな子やえんがわの上にうつる日を追いて

ふくじゅそうの
つぼみいとおしむおさな子や
夜はいろりの火にあててをり

金色の小さき鳥のかたちしていちようちるなりお
かの夕日に
ほおずきを口にふくみて鳴らすごとかわずは鳴く
も夏のあさ夜を

十一　いずみを求めて

十のころであった。私は父につれられて、近くの高い山に登った。その帰りに、近道をして谷をおりてくると、そこに小石でかこまれた美しいいずみがあった。

父は、そのいずみの水を手ですくって、いくどもうまそうに飲んでから、私にいった。

「どうだ。この水を飲んでごらん。これは、名高いいずみなんだよ。」

水は大きなごろごろした石ころのあいだから、ブツブツと

音をたててわきだして、一方のかけたところから、さらさらと流れだしていた。

私は手をいれて、それをすくおうとすると、おく山の雪がとけてそのまましみてきたかと思われるようにつめたかった。ちょっと歯にしみたが、うまかった。あまいような、すずしいような、気の晴れ晴れするような味だった。

「そこに流れているのがまつ川だ。私たちの村の用水も、このまつ川からひいてあるのだ。」

いずみをあふれでた水は、さらさらと走って、やがて、すぐ下のすこし大きな川に流れこんでいた。

帰り道で、父は次のような話をしてくれた。

むかし、ひとりの茶人があった。茶のうまさは、お茶そのもののうまさにもよるが、たてる湯のうまさがだいいちである。なんとかしてうまい水のわきでるいずみをさがしだしたいものと思った。

茶人は、日本じゅうを歩きまわって、うまそうな水や名高いいど水をためしてみたけれども、どうも気にいらなかった。

ところが、てんりゅう川の中流の水をくんで、それで茶をたててみると、いままで味わったこともないような、ふしぎ

な味が感じられた。茶人は、この上流にいいずみがあるのではないかと気がついた。船をやとってこぎのぼりながら、ところどころでその水でお茶をたてる。すると、いい味は、もっと遠いところで感じられる。右岸や左岸では、その味がきえてしまうことがあっても、中ほどでは、いい味はたえなかった。それで、茶人は、いずみはどうしても支流のほうにはなくて、遠い上流にあるのだとさとった。

けれども、流れは急流だし、雨の日も風の日もある。さかのぼるのもたやすくなかった。つれの人は、この茶人ほど熱心ではないから、やめて帰ろうといった。しかし茶人は、いろいろなこんなんをしのいで、みんなをはげましては上流へ

たどっていった。

大きな支流が流れこむところへくると、ときどきあまい水の味がわからなくなってしまう。あともどりして飲んでみたり、ずっと上流へいってためしてみたり、深いところの水をとって飲んでみたりしなくてはならなかった。

茶人はすこしもくっせず、求め求めて、いつか、いまのしずおか県のさかいもすぎ、ながの県にはいった。そうして、てんりゅうきょうという景色で名高いところもすぎて、四十キロあまりもきてしまった。

ここまでくると、てんりゅう川もよほど水かさがへっていた。ここで茶人のしたには、まぎれもないいい味がはっきり

と感じられるようになった。

「きっと、いずみはこの近くにある」。

茶人はつれの人にいった。まつ川がてんりゅう川に流れこんでいるところの近くまでくると、いい味の水は、左の岸のほとりを流れていた。ためしにまつ川の水をにて飲んでみると、たいへんうまかった。念のため、もっと上流の本流の水を飲んでみると、もうそれはただの水であった。

「いずみはまつ川の上流にある」。

茶人は、長いたんきゅうの旅が終りに近づいたことを知って喜んだ。

茶人たちは、ここで船をすてて、岸にそって上流に向かって歩きながら、ときどき水をふくんではいずみをさがしていった。

はじめの八キロほどは、村ざとがあって川べりに道もあったが、いまはそれもなくなって、大きな岩がごろごろとゆくてをふさぎ、まつ林におおわれた道もない谷まになった。

そこからさらに、すこしさかのぼって水を飲んでみると、

いい味は、すこしもなかった。

そこで気をつけてみると、右岸からさらさらと流れ落ちる小さな谷川がある。そこをくんで飲んでみると、それこそまぎれもないうまい水であった。

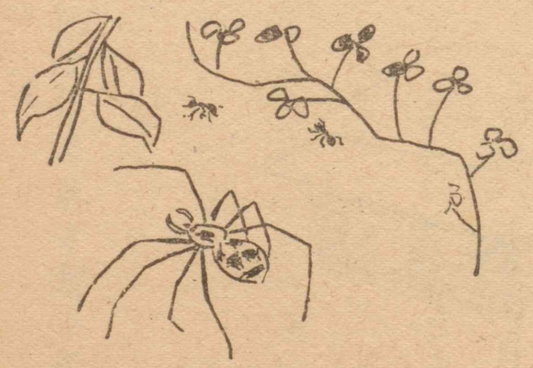
そこで、谷川をさらにさかのぼると、岩まからちょろちょろとわきでるいずみがあって、それでもう終りであった。茶人は、そこをほりくぼめ、小石でどてをつくり、いずみをくんでつれの茶人と茶をたてて、心から楽しんだということである。

十二　一ぴきのくも

一ぴきのくもがいました。黄色と黒のしまもようのついた大きなくもでした。

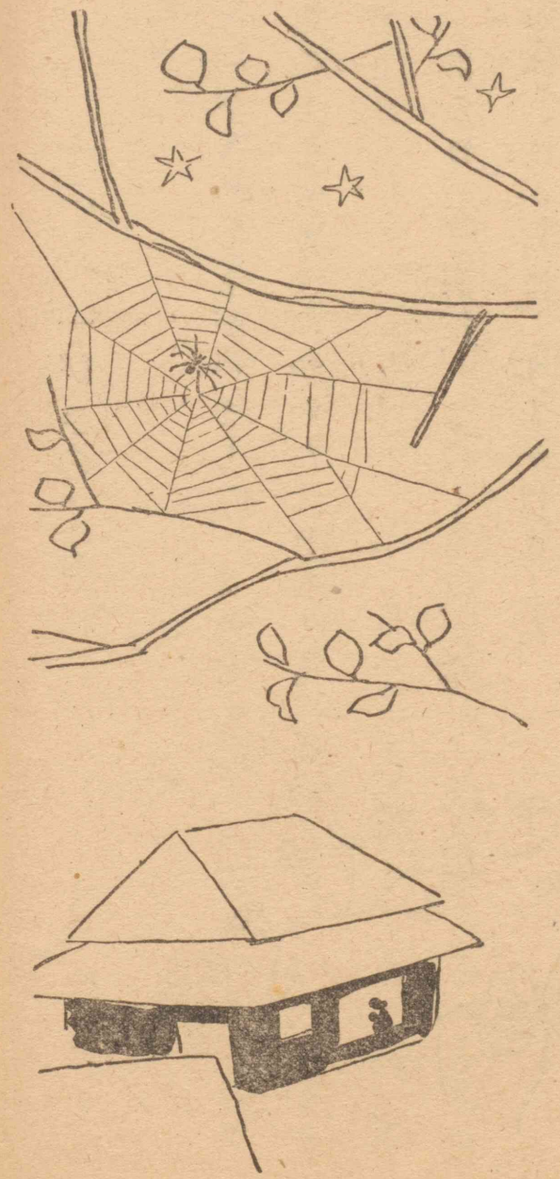
ある日の夕がた、このくもは、木と木のあいだに、すをかけました。

「今夜はうまいえさがかかるかな。この二三日というものは、ちっともかからなかったから、おなかが



すいてしまった。

ここ四五日は大風がふくし、雨はふるしで、あみもはることはできませんでした。



星が光りだしました。どこかであかちゃんのなき声がしています。子もり歌もきこえてきます。くもは、その子もり歌を耳にしながら、光る星をみあげていました。

そのとき、あみがにわかにゆれました。くもは、きっとなってその方をみつめました。あぶが、足をひっかけて、ブンブンいっているところです。

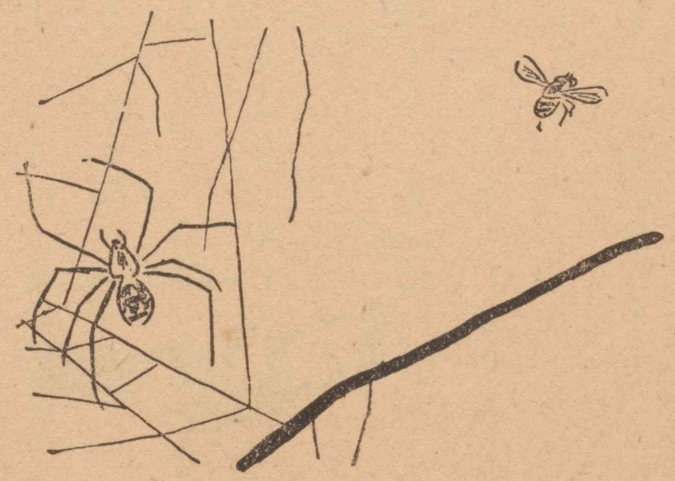
くもが、いきなりとびかかっていくと、あぶは、力いっぱいはばたきをして、すいとにげていきました。おまけに、あみに大きなあなをあけてしまいました。

「しまった」。ぶつぶつひとりごとをいいながら、くもは、やぶれたところをつくろいかけました。

「こんどこそは、にがさないぞ。」と、くもは、足をふんばって身がまえをしました。

星はだんだんきれいに光ってきました。あかちゃんのなき声も、子もり歌もきこえませんでした。風が思いだしたようにふいてくるので、あみがゆれ、くももいっしょにゆれました。

ブンブンブン、ブンブンブーンと、遠いところで、は音がしました。



それは、みつばちであることが、くもにはすぐわかりました。

ブンブンブーン、は音がだんだん近づいてきます。

「あれが、うまくひっかかるといいな。」

くもが、じいっと息をころして待っていると、みつばちは、くものあみを知らないで、まっすぐにとんできました。

ブブブブ——

「そら、ひっかかった。」

くもはみつばちにとびかかりました。みつばちも、くもに向かいました。

くもは、ふといつなをとりだして、みつばちのからだをし

ばりつけようとしました。みつばちは、そのつなをさけてにげようとしましたが、どうしても手足がうまく動きません。

そのうちにみつばちのからだも、つなにまかれそうになりました。ぐずぐずしていると、そのままたべられるので、みつばちはだいじなはりをだして、くもをねらって、ちくりとつきさしました。それにはさすがの大きなくもも、びっくりしました。

「あいた、あいたたたた」。

くもが、手でさすっているあいだに、みつばちは、つなをほどいて、あみをくい切って、にげていってしまいました。

ゆうゆうととんで、にげていくみつばちのうしろすがたを

みていましたが、くもはどうすることもできません。それより、自分のからだがはれてくるし、いたいし、苦しくてどうにもなりませんでした。

しばらく、目をつぶってしずかにしていると、また、パタパタというは音がきこえてきました。

「あ、こうもりだな」。

思わずそちらをみると、こうもりは、ひょうきんなかっこうをして、こちらにとんできます。あみにつきあたってはたいへんと、くもが思ったとたんに、ばさりとこうもりのはねにたたかれました。あみは、すっかりやぶれて、くもはそのまま地面に落ちました。

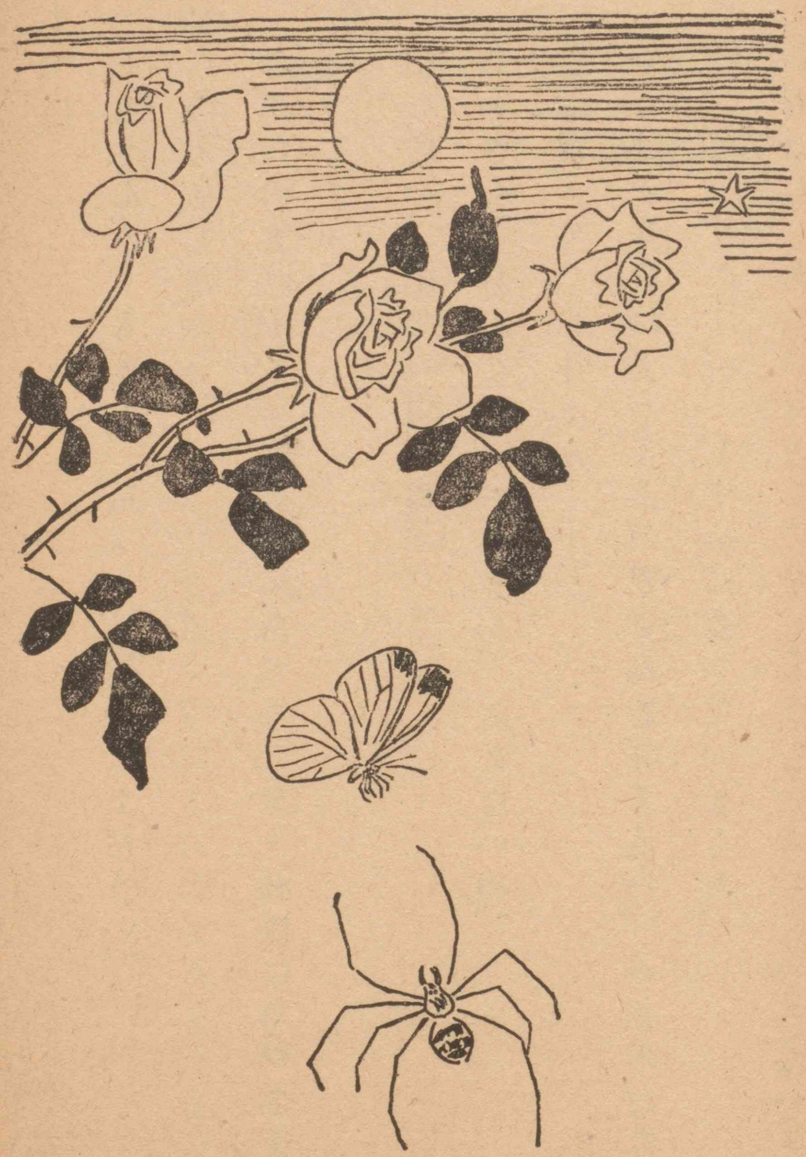
「あ、びっくりした。」

くもが気がついてみると、あたりにいいにおいがします。まっ白なばらが、たくさんさいていたのです。いいにおいをかいでいると、いつのまにか、いままで苦しかったからだのいたみもきえていきました。

目のまえのばらの花が動いています。おかしいなと、ふしぎに思ってよくみると、それは白いちょうちょでした。

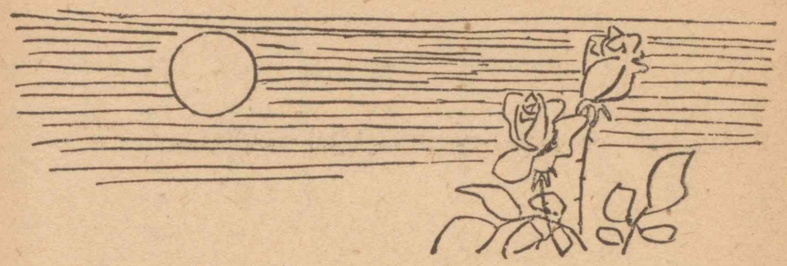
「なんだ。ちょうちょか。ちょうどいいや。うまいごちそうだ。」

くもは、長い手をのばして、わけなく白いちょうちょをとらえました。大きな口をあいてたべようとしたとき、ちょう



ちょは、
「くもさん、くもさん。ちょっと待ってください。」
とたのみました。
こうたのまれると、だまってたべてしまうわけにもいきません。
「なんだい、なんの用かね。」
「くもさん、あんないいお月さん、みえないの。」
「なんだって、お月さん――」
くもは、首をねじって上の方をみあげました。いまのぼりかけたばかりの月が、しずかに光っていました。
「くもさん、あのお月さんのところへいってみたいと思いま

せんか。」
「――」
「わたし一どでいいから、お月さんのところへいきたいと思います。」
「どうして。」
「おかあさんをさがしてくるのです。」
「おかあさん。」
くもは、このおかあさんということばを、長いこと耳にしたことはありませんでした。また、口にしたこともありませんでした。
いま、ちょうちょに、「おかあさん。」といわれて、きゅうに



なつかしくなりました。くもの小さなときのことが、ゆめでもみるように思いだされてきました。

「そうか、おかあさんをさがしにいきたいのか、ちょうちょさん」。

「――」

「なんだか、わたしも、おかあさんをみたくなったよ」。

「くもさん、今夜は助けてください」。

「ああ、いいとも」。

くもは、ちょうちょを手ばなしました。

「ありがとう、くもさん」。

「あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。いましがた、みつばちにさされて、苦しんだことも知っています。だから、わたしをたべてもいいと思っているんだけど」。

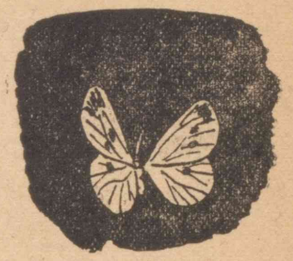
「いや、もう、おまえさんをたべやしないよ」。

「わたし、おかあさんにひと目あったら、もう、命はほしいとは思いません」。

「――」

「それまで、命を助けておいてください」。

「わかった、わかった。さあ、早くとんでいくがいい」。



ちょうちょは、うれしそうにはねをととのえました。それから、まっ白なはねをひろげたかと思うと、ひらりひらりと舞いあがりました。ちょうど白ばらの花がとんでいくように。

くもは、とんでいくちょうちょをみ送りながら、

「ちょうちょさんは、はねがあるからいいな。」

と、ひとりごとをいいました。

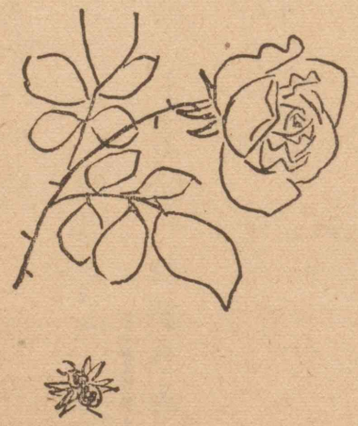
くもは、おなかがすいているのに気がつき、また、あみをかけようと考えました。くもはのそのそと歩きました。けれども、なんだか気がすすみません。それで、そのまま手足を

ちぢめて、じっとすわっていました。あたりには、やはりばらの花のにおいがしていました。

くもは、うつらうつらとねむくなってきました。

「今夜は、ばらのかげでねむることにしようかな。」

くもはからだを小さくまるめて、ころっと横になりました。目をつむると、だれかが、くもの頭をなでています。上をみると、わらっているではありませんか。くもは、ふしぎな顔をしながら、しげしげとみつめました。



「わたしの顔ばかりみて、おかしいこと。」
「　」
「まあ、おまえは、わたしをわすれたのかい。」
「　」
「わたしは、おまえのおかあさんじゃないかね。」
おかあさんときいて、くもは、手をうんとのばして、とりすがろうとしました。そのひょうしに、くもは、目がさめました。
「なんとみじかいゆめだろう。」
と、くもは、いまみたばかりのゆめを、なんどもなんども思い返しました。

月はもう頭の上までできていました。つゆが木の葉にたまりました。たまったつゆが、しずくになって、ポタリポタリと落ちてきました。
くもは、目がさえてなかなかねむれません。
「くもさん、くもさん。どうしてねむらないの。」
こう話しかけたのは、ばらの花でした。
「もう夜ふけですよ。おやすみなさいな。」
「　」
くもは、なんといって返事をしていいかわからないので、そのままだまっていました。
自分は、こうもりのために、高いところからたたき落され

たが、たまたま、あの白いちょうちょにあうことができた。それから、いいゆめをみることもできた。いままた、ばらの花のやさしいことばをきくこともできた。

くもは、これらのことを一つ一つ思いだしているうちに、心持が、しだいにかわってきました。

ちょうちょにしても、ばらの花にしても、なんとしずかなくらしをしているのだろう。なんとおだやかなくらしをしているのだろう。それにくらべて、自分は、なんとあらっぽいくらしをしていることだろう。

あみをはり、かくれていて、ほかの虫がひっかかると、いきなりとびついてかみころすなんて、なんとひどいことをし

てきたものだろう。

くもは、そっと自分の手をのばし足をのばしてみました。ふしくれた手、とがった足、うすきみのわるいかたち、いままでにこの手で、この足で——くもは、自分ながら自分のからだが、そらおそろしく思われてきました。

白ばらの花は、もう話しかけなくなりました。ぐっすりねむってしまったのでしょう。

くもが、月の光にちらりちらりと光りながら落ちてくる夜つゆをみていると、風がふいてきました。風と思ったのは、そうではなくて、つばめがすいととんできたのでした。

くもは、このつばめにひろわれました。くもは、つばめの

口ばしにはさまれたまま、空をとんでいきました。

くもは、力いっぱいもがけば、あるいは、つばめのくちばしからころげ落ちることができたかもしれません。

けれども、べつににげだそうとはしませんでした。つばめは、麦畑らしい土地の上をとびました。湖の岸べをとびました。深い森のそばをとびました。

夜明けが近づいて、東の空が、ほんのりとしらみかけてきました。

「自分の命は、つばめさんにあげよう」。

こう決心がつくと、くもは、すっかりらくな気持になりました。いまのいままで、みにくいと思っていた自分のからだ

も、もうみにくいとは思えなくなりました。

「お月さんのところへとんでいったあの白いちょうちょは、どうしたろう。うまくおかあさんにあえたかしら。」

そんなことをくもは思いました。

飲 (119)	類 (85)	坂 (54)	湖 (32)	園 (23)	候 (19)	器 (6)
湯 (121)	急 (109)	服 (63)	貝 (33)	次 (23)	約 (19)	加 (8)
支 (122)	止 (109)	格 (70)	雑 (34)	養 (23)	協 (19)	港 (8)
熱 (122)	制 (110)	待 (76)	登 (36)	利 (23)	告 (19)	情 (10)
	勇 (111)	移 (76)	味 (36)	法 (24)	民 (20)	景 (10)
	階 (116)	主 (78)	判 (47)	燈 (29)	航 (21)	例 (10)
	求 (119)	説 (84)	拝 (47)	畑 (32)	社 (21)	演 (14)

国語　第四学年　下
Approved by Ministry of Education
(Date Jan. 10, 1950)　(小国 402)

昭和二十二年一月十五日　翻刻発行
昭和二十五年六月一日　修正印刷　定価金二六円四〇銭
昭和二十五年七月十五日　修正発行
(昭和二十五年七月十五日　文部省検査済)

著作者　文部省

発行者　東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社
代表者　長　得一

印刷者　東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社堀船工場
代表者　長　得一

発行所　東京書籍株式会社

広島大学図書
広島大学図書
0130449970
文庫
50
970